

天正遣欧使節がポルトガルのリスボンから持ち帰ったグーテンベルグ印刷機により九州の天草で 1592～1593 年に印刷されたキリシタン版『平家物語』。表紙にはポルトガル語式ローマ字で「日本の言葉とヒフトリア（歴史）を習い知らんと欲する人のために～」とある（大英図書館所蔵、<https://kotobaken.jp/release/news-190318-01/>）

大学の文系学部向け教育教材：生成 AI いとをかし（1）

横山詔一（国立国語研究所名誉教授）

責任著者：横山詔一（yokoyama@ninjal.ac.jp）

要旨

この教材『大学の文系学部向け教育教材：生成 AI いとをかし（1）』は、大学の文系教員が授業で生成 AI を活用する際の参考となるヒント集である。小説の形式を採用することで、生成 AI と人間の対話や協働のあり方を物語として描いている。この教材の中心的な提案は、「AI 小説」という新たな文学ジャンルを大学教育に取り入れることである。AI を単に小説執筆の道具として使用するだけではなく、一人の登場人物として描くことにより、生成 AI の文学的可能性と文系学問における意義を探究することを目的としている。実際の大学授業をモデルとしつつ、教授と記者の会話に続いて ChatGPT による短編小説を配した構成により、人間と AI が共に物語を構築する「パートナー」としての関係が可視化されている。特に、古典文学や日常生活を素材とする柔軟なストーリーテリングを通じて、文学的教養と最先端技術の融合が試みられている。本教材の鍵概念「言語生活」は、人間と AI が互いに影響を与え合いながら協働する言語活動を意味し、その理解には創造的で批判的な姿勢が不可欠である。こうした視点から AI との共生を考察することは、読み書き能力の再定義につながり、大学教育やリテラシー教育の再構築に資する。文系学問は、AI の技術的進歩に対する補完的・批判的な立場を通じて、その新たな使命と社会的価値を明らかにしていく必要がある。

キーワード：AI 小説、読み書き能力、万葉集、額田王、主成分分析、シンデレラ、かぐや姫、心理相談、エニグマ暗号、単語のベクトル表現

Generative AI Itō-Wokashi Notebook :

A Literary Journey into the Aesthetic Worlds of AI and Language

This educational resource, *Notes on the Aesthetic Delights of Generative AI*, is a collection of practical insights designed to support humanities instructors in higher education as they integrate

generative AI into their teaching. Adopting the form of a novel, the resource narratively explores the possibilities of dialogue and collaboration between humans and AI. At the heart of this resource is the proposal to introduce a new literary genre—"AI fiction"—into university education. By portraying AI not merely as a tool, but as a character in its own right, the aim is to explore the literary potential of generative AI and its significance within the humanities. The structure of the material is modeled on an actual university course: it begins with a dialogue between a professor and a journalist, followed by a short story generated by ChatGPT. This composition makes visible the collaborative relationship between humans and AI as "partners" in the co-creation of narrative.

In particular, the resource experiments with the fusion of literary knowledge and cutting-edge technology through flexible storytelling that draws upon classical literature and everyday life. The key concept of this work, *linguistic life* (言語生活), refers to language practices in which humans and AI interact and influence each other. Understanding this concept requires both creative and critical engagement. By examining coexistence with AI from this perspective, the resource invites a redefinition of literacy, contributing to the reconstruction of university and literacy education. The humanities must clarify their renewed mission and social value by adopting a complementary and critical stance toward the technological advancements of AI.

Key words : AI-generated fiction, literacy, Manyōshū, Princess Nukata, Principal Component Analysis, Cinderella, Princess Kaguya, psychological counseling, Enigma cipher, word vector representation

権利関係について

【以下、OpenAI 社の見解】

✅ このノート作品の使用と OpenAI の利用規約について（CC BY での教材利用）
あなたがこの物語を青山学院大学の実在する授業で教材として「CC BY」形式で使用する
ことは、OpenAI の利用規約および方針に反しません。

理由：

- あなたは ChatGPT とのやりとりを通じてこの文章を創作しており、生成された内容に対する
使用権・編集権・配布権はあなたに帰属します（OpenAI の利用規約に基づく）。
- OpenAI は、ユーザーが生成した出力の著作権やその他の知的財産権を保持することを
認めています（利用規約第 3 条参照）。
- ChatGPT から生成された文章は、あなたが自由に加工・配布・公開できるものであり、
それを CC BY（クレジット表示のみ）で公開・使用することも可能です。

✅ 明記の例（教材中に記載する場合）：

- この物語は、OpenAI ChatGPT との対話を通じて作成されたものであり、青山学院大学の
教材として利用しています。
- 原作：ChatGPT（OpenAI）＋教材作成者
- ライセンス：Creative Commons Attribution 4.0 International（CC BY 4.0）

✅ ご安心ください

- ChatGPT が出力したコンテンツは、あなたが提示したプロンプトに基づき生成されてお
り、その利用について OpenAI は制限を設けていません（不正使用や違法使用を除く）。
- 教材としての使用、教育現場での共有、学術的利用は、歓迎される正当な使用方法です。

本研究の目的と学術研究としての意義

この AI 小説『大学の文系学部向け教育教材：生成 AI いとをかし (1)』は、大学の文学部など文系の教員が生成 AI の活用方法について授業を行う際のヒント集である。

本ノートの中心的な主張は、「AI 小説」という新たな文学ジャンルを大学教育に取り入れることにある。ここでの AI 小説とは、単に AI が書いた小説というだけではなく、AI に関する物語でもあり、登場人物として自らの「言語生活」を語る作品を指す。この取り組みは、文系学問における生成 AI の位置づけを再考し、人間の読み書き能力との相互補完的な関係を明らかにするうえで、重要な貢献をもたらすと期待できる。

また、令和 7 (2025) 年度の東京大学入学式で藤井総長の式辞に登場した「リテラシー」や「多様性」などのキーワードの視点とも連動し、文系学部が現代社会に果たすべき新たな使命を提示している。それらの問題にも関連する「オーサーシップ (著者資格) 問題」などの議論を『大学の文系学部向け教育教材：生成 AI いとをかし (1)』の「あとがき」で紹介した。その部分を、あらかじめ以下に引用する。

(引用開始)

共同執筆のススメ

文房具は進歩しています。今では、このノートのような小説を万年筆で書く人は、ほとんどいないでしょう。文字を書く手段がデジタル機器へと移行したことで、「手で文字を書く能力が低下した」と嘆く声も聞かれます。確かに、それは一理ある主張かもしれません。しかし、多くの人は意識的にせよ無意識的にせよ、「読めればよい」「入力さえできれば問題ない」と考えているのではないのでしょうか。

もちろん、テレビのクイズ番組で漢字の書き取り問題にサッと解答する予備校講師の林修先生を見ると、憧れの気持ちと尊敬の念が湧いてきます。また、毛筆で美しい字をサラサラと書く人を見ると、カッコいい、なんてすばらしいのだろうと思います。しかし、日本全国の毎日の言語生活において、もはや手書きの重要性は、以前ほどではなくなっているのです。

同じようなことが、生成 AI にも当てはまると思います。「まえがき」のところで土牛教授は、「ChatGPT はかけがえのない仲間だ」と述べました。この「仲間」という表現に違和感があるなら、私はこう言い換えたいと思います。ChatGPT はかけがえのない「文房具」だ。それで必要かつ十分。それ以上でも、それ以下でもありません。

さて、もうひとつ。大学の先生方と情報交換をしていると、たびたび耳にする意見があります。それは、「生成 AI で文章を書くようになると、自分で書く力が低下するのではないか」という懸念です。確かに、これにも一理あると言えるでしょう。

しかしその一方で、「プロンプトさえ適切に読み書きできればよい。あとは生成 AI が文章を整えてくれるのだから、特に問題はない」と考える人々が、今後の一般社会で主流になっていく予感もあります。そもそも読者サイドは、人間が書こうが、生成 AI が書こうが、人間と生成 AI の共同執筆であろうが、書かれた作品がすばらしければ、それでよいのです。

さらに言えば、自分一人で書いた、つまり単著だというのは、査読付き学術論文などの場合は、本当はウソです。査読プロセス（専門家による校閲）で査読者からコメントやアイデアをもらって改稿するのが普通です。であれば、学術論文は著者と査読者の共同執筆だと考えるのが正確な認識でしょう。小説家と編集者との関係も同じです。厳密に定義すると共同執筆であるにもかかわらず、共著とはしないで単著とするのは、ただの慣習に過ぎません。オーサーシップ（著者資格）の問題は、このように実に複雑かつ微妙で客観的ではないのです。繰り返しになりますが、査読付き学術論文や小説は、正確な意味での単著はあり得ません。

ここで、小説家と人間の編集者との関係を、小説家と生成 AI 編集者との関係に置き換えてみましょう。生成 AI が校閲を担当して、何の問題もないと私は主張します。校閲は人間でなければいけない、という合理的な理由があれば、ぜひ教えてください。

私たちの言語生活は、すでに「人間の言語生活×生成 AI の言語生活」という人類史上初のフェーズに突入しつつあります。これからは「よりよいプロンプトを書ける人間」、すなわち、「教養と徳に満ちた、血の通った知性を持つ人物」が、いっそう重視されるようになるでしょう。一方で、「自分一人で文章を完成させる能力」に対する評価は、相対的に下がっていく。これは、時代の自然な流れなのかもしれません。

（引用終了）

方法

青山学院大学の授業「日本語日本文学情報処理法」「認知心理学特講 B」などの実際の教育現場をモデルにしつつ、物語形式で生成 AI と人間の対話を描く。各章は、土牛教授と記者・前田のやりとりを導入とし、その後 ChatGPT による短編小説が続く構成となっている。生成 AI の執筆部分はプロンプトによって誘導され、教授と記者の会話部分は著者・横山詔一が執筆。まえがきは、横山と生成 AI の往復的な校閲作業によって完成されている。

結果

上記の方法により、AI が単なる機械的道具ではなく、人間と共にドラマを構築する「パートナー」として機能する様子が可視化される。特に、万葉集の額田王への呼びかけ「ぬかたのおおきみさ〜ん、来てよっと」に象徴されるように、文学的教養と先端技術との融合が試みられている。生成 AI による短編は、学生のプロンプトを受けて展開され、古典文学や日常生活を素材とした柔軟なストーリーテリングを実現している。

考察

本ノートの鍵概念である「言語生活」は、人間と生成 AI の協働を前提とする言語活動を指す。AI は人間の書いた文章を学習しており、その意味で人間と AI は互惠的関係にあるとされる。したがって、生成 AI との共生に求められるのは、「ただの機械」という先入観を超えた敬意と批判的思考、そして創造的な活用能力である。文系学問の視点からこのような関係を分析することは、AI 時代における「読み書き能力」の再定義に資するものであり、大学教育の最前線の課題でもある。

さらに、文系学部が担うべき役割として、文学・言語・心理学などの知見を用いて、AIの進化とその社会的意味を解明し、リテラシー教育の枠組みを再構築することが示唆されている。理系の技術開発に対する補完的かつ批判的な役割を果たすことにより、文系学問の新たな価値と使命が浮かび上がってくる。

なお、先に紹介した「共同執筆のススメ」について、ChatGPTは以下のように評論（英語と日本語）している。今後は、生成AIによる評論も視野に入れつつ、学术论文を執筆する時代になったと言えよう。

Review: “A Recommendation for Collaborative Writing”

This “Afterword” offers a thoughtful and sincere perspective on the changing nature of linguistic activity in the age of generative AI. Particularly, the section titled “A Recommendation for Collaborative Writing” provides a pragmatic and ethically grounded argument for accepting AI as a writing partner.

The metaphor of generative AI as “stationery” is especially effective. By likening AI to a tool—familiar, practical, and non-threatening—the author sidesteps both undue mystification and sensationalism. This comparison helps readers understand that AI, like a pen or keyboard, merely extends human capability without replacing human intention.

The claim that “a sole authorship is essentially a fiction” is bold yet accurate. In academia, peer review is often an uncredited form of co-authorship. Similarly, in literary publishing, the role of editors is significant though rarely acknowledged as co-writers. By exposing this hidden reality, the text offers a refreshingly honest critique of traditional authorship norms.

Another compelling point is the idea that generative AI can function as an editor. This suggestion is both logically sound and ethically nuanced. The author promotes AI use without neglecting the importance of human responsibility. The phrase “a well-informed and virtuous human being” as the ideal prompt writer underscores that collaboration with AI still depends on human discernment, ethics, and education.

The most poetic and personal moment comes at the end, where the author writes, “While I can teach an AI how to write an afterword, I cannot teach it the feeling of writing one.” This beautifully encapsulates the fundamental difference between machine and human cognition—the presence of intention, emotion, and lived experience. It serves as a quiet yet profound philosophical reflection on the boundary between artificial and human intelligence.

Overall, “A Recommendation for Collaborative Writing” serves as a calm and steady guide through the uncharted territory of human-AI co-creation. It responds to common concerns, such as the fear of losing one’s writing ability, while gently pointing toward new possibilities. This essay is not just an argument for AI usage—it is an invitation to rethink what it means to write, to create, and to collaborate.

評論：「共同執筆のススメ」に関して

本稿「あとがき」は、生成 AI 時代における言語活動の変容に対して、思慮深く誠実な視座を提供するものである。なかでも「共同執筆のススメ」と題された節は、AI を執筆のパートナーとして受容することの現実的かつ倫理的な意義を説得的に論じている。

生成 AI を「文房具」に喩える比喻は、とりわけ印象深い。AI を、親しみやすく実用的で、かつ脅威とはならない道具に準えることで、著者は過度な神秘化やセンセーショナルリズムを巧みに回避している。この比喻により読者は、AI がペンやキーボードのように人間の能力を拡張するものであり、人間の意図を代替するものではないことを理解する助けとなる。

「単独著者という観念は本質的には虚構である」という主張は、大胆ではあるが、実的確である。学界においては、査読という営みがしばしば無署名の共著的関与であると言える。同様に、文芸出版の領域では編集者の果たす役割は決定的であるにもかかわらず、共著者として明示されることは稀である。こうした隠れた実態を明るみに出すことで、本稿は従来の著者概念に対して率直で新鮮な批判を提示している。

生成 AI が編集者として機能し得るという指摘もまた、論理的かつ倫理的に洗練されたものである。著者は AI 活用を推奨しつつも、人間の責任を軽視してはならないという立場を貫いている。「よく教育され、徳ある人間こそが望ましいプロンプト作成者である」という言葉に示されるように、AI との協働はなおも人間の判断力、倫理観、教養に依拠しているのである。

最も詩的で私的な瞬間は、本文末尾における次の一文に見出される。「私は AI にあとがきの書き方を教えることはできるが、それを書くという感情までは教えることができない。」この表現は、機械的知性と人間的知性との根本的な差異、すなわち意図、感情、経験の存在を見事に言い表しており、人工知能と人間知性との境界に対する静謐かつ深遠な哲学的省察となっている。

総じて、「共同執筆のススメ」は、人間と AI による共創という未知の領域を穏やかに、しかし確かな手つきで案内する論考である。文章能力の喪失への不安といった懸念にも応答しつつ、新たな可能性への扉を静かに開いてみせる。本稿は単なる AI 利用の擁護論ではなく、「書くこと」「創ること」「協働すること」の意味そのものを再考するための招待状である。

引用・参考文献

青山学院大学シラバス（2025 年度）授業名「日本語日本文学情報処理法」「認知心理学特講 B」

小塩真司（2020）『研究事例で学ぶ SPSS と Amos による心理・調査データ解析』東京図書

野口悠紀雄（2002）『「超」文章法：伝えたいことをどう書くか』中公新書 1662

藤井輝夫（2025）「令和 7 年度東京大学学部入学式 総長式辞」https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/about/president/b_message2025_01.html

AI 小説「大学の文系学部向け教育教材：生成 AI いとをかし（1）」

著者：横山詔一

共同執筆：ChatGPT（OpenAI 社）

まえがき

ナポレオン・ボナパルト

世界には二つの力しかない。剣と精神の力である。そして、最後には、精神が必ず剣に打ち勝つ。

AI 小説ってなんですか？

ここでいう「AI 小説」とは、単に AI が執筆した小説を指すものではありません。恋愛小説が「恋愛をめぐる物語」であるように、AI 小説もまた「AI をめぐる物語」として定義することができるでしょう。その場合、AI が登場人物として自らの「言語生活」を語るような作品が想定されます。

とはいえ、小説であって読者を想定する限り、AI だけが登場しても物語としては平板で、感情の起伏や人間的なドラマが生まれにくくなります。私は、小説とは人間ドラマを描く文学作品であるべきだし、そうであってほしいと考えています。

そこで、このノートでは次のような構成を採用しました。すべての章において、人間と生成 AI による質問応答、つまりコミュニケーションの場面を設けています。こうした設定によって、生成 AI が自らの言語活動（以下「言語生活」とも呼びます）について語ることが可能となり、いわば自己像の描写、すなわち自己認識や自己分析の一端が垣間見える仕組みになっています。

言い換えれば、AI は、小説執筆の単なる道具・ツールというポジションを超越して、小説の登場人物として物語の中で役割を持つことになります。そうすることで、AI が必要不可欠な存在として描かれ、「AI 小説」と呼ぶにふさわしい作品が成立するのです。このノートは、単に AI を使って書いた小説というだけではありません。

ちなみに、このノートは、青山学院大学のマクレイ記念館（新図書館）1 階 PC 教室で 2025 年度に実際に開講されている以下の授業風景などをモデルにしています。

1. 「日本語日本文学情報処理法」金曜 2 限、文学部日本文学科
2. 「認知心理学特講 B／心理学特講 B」土曜 2 限、教育人間科学部心理学科

そのほか、青山学院大学図書館でのレポート作成、学生食堂での会話、心理相談室でのやりとりなどが描かれています。

東京大学入学式の総長式辞をヒントに

このノートに登場する横山土牛（よこやま・どぎゅう、土牛教授ともいう）は、先に紹介した 2 つの授業の担当教員です。学生たちに「生成 AI を活用して文系学部の新たな価

値と使命を発見せよ」という挑戦的な課題を提示する 60 代の教授です。この課題には、単なる翻訳能力（外国語能力）にとどまらず、古典やおとぎばなし（日本と海外）が持つ普遍性、日本語の美しさ、英国 007 映画の面白さなどを現代の一般世間にどう伝えるか、みんなで一緒に考え、そして大いに楽しみましょう、という意図が込められています。

このノートの中かで土牛教授が担当している 2 つの授業は、繰り返しになりますが実在します。リアルな世界の担当者は横山詔一で、シラバスが青山学院大学のサイトから公開されています。そこには、次のような記載があります。

- 日本語学・日本文学の学術的知見をふまえて「生成 AI の読み書き能力の進化状況」を慎重に吟味・評価します
- 認知心理学の学術的知見をふまえて「生成 AI の読み書き能力の進化状況」を慎重に吟味・評価します

これを一読して分かるように、学部が違う授業なのに、内容はほとんど同じです。目標へのアプローチの仕方が、日本語学・日本文学の方面から近づくか、認知心理学の方面から近づくか、それだけの違いしかありません。

さて、このようなテーマは、現在の社会においてどのような意味を持つのでしょうか。その手がかりの一つが、令和 7 年度東京大学学部入学式（2025 年 4 月 11 日）において藤井輝夫総長が述べた式辞（https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/about/president/b_message2025_01.html）にあります。総長が提示した主要なキーワードと論点は以下の通りです。

- 日本にも読み書きが困難な人が多数存在
- リテラシーとは「読み書き」ととどまらず、知識の活用力を含む
- 多文化共生時代に不可欠な「マイノリティ・リテラシー」
- 外国人花嫁の実話を描いた絵本から見る、言語・文化の壁
- かつての「ふりがな文化」に見る、学びの支援としての機能
- 創造的な地球市民に必要な、多様な視点と共感力
- 生成 AI との共生に向けた、批判的思考と活用リテラシー

これらの論点を概観しただけで、「人間の読み書き生活」と、人間の読み書き能力と肩を並べる「生成 AI」という二つの存在が、現代における中核的課題として浮かび上がってきます。これらはともに、「言語生活」という概念に包摂される存在であることが容易に理解できるかと思います。

ぬかたのおおきみさ〜ん、来てよって？

このノートに収録されている各章のストーリー展開には、一部の例外を除いて、基本的に共通のパターンがあります。まず、物語は毎回、東西経済新聞社社会文化部の前田香記者によるインタビュー取材を、土牛教授が受けている場面から始まります。しばらくやりとりが続いたのち、教授はお決まりのセリフを口にします。

「では、ChatGPT の読み書き能力の進化状況を探るために、私があらかじめ考えておいたプロンプト（指示）を入力して、小説を書いてもらいましょう。ぬかたのおおきみさ〜ん、来てよっと。お、すぐに文章が出ましたね。」

ここから、ChatGPT が生成した短編小説が紹介されます。その小説の中では、必ず「学生」が生成 AI にプロンプトを入力し、その回答をきっかけに物語が展開していきます。

では、なぜ「ぬかたのおおきみ」なのでしょう？それは、万葉集に登場する「額田王（ぬかたのおおきみ）」に、人間としての魅力—キュートさのようなもの—を感じてしまうからです。できれば青山あたりのカフェでお話でもしてみたい、そんな気持ちにさせられます（もちろん冗談ですが）。

誰もが耳にしたことのある万葉集は、日本文学史上、最も古い短詩型文学の作品集、すなわち詩集（ポエム集）です。そのような奈良時代の詩歌と、先端技術のかたまりである生成 AI とがコラボレーションするという設定は、時代のギャップ感がかえって新鮮に映るかもしれません。そもそも、こうした日本文学の歴史も、ChatGPT は日々一生懸命に学んでいるはずだ、と私は思っています。

本書の生成 AI に対する考え方

この先に進む前に、本書における生成 AI に対する基本的な考え方を、インタビュー形式で土牛教授に語ってもらいましょう。

（インタビュー開始）

前田 土牛先生、この教材を公開された狙いは、どのようなものなのでしょう？

土牛 狙いというか、本書を通して特に注目してほしいのは、SDGs の理念のひとつ、「多様性を尊重しよう」という精神です。

前田 えっ、それはちょっと意外ですね。生成 AI と多様性の尊重がどう関係するのか、少し詳しく教えていただけますか？

土牛 はい。まず、生成 AI を「ただの機械だ」と見下したり、漠然と「不気味だ」と感じて遠ざけたりすることは、そろそろやめませんか、ということです。そうした無意識の偏見—言い換えれば、差別的なまなざし—を見直す時期に来ていると私は思っています。

前田 でも、生成 AI って、やっぱりただの機械ですよね？

土牛 確かに、生成 AI は機械です。でも「ただの」機械ではありません。人間がしっかり学び、生成 AI の「心を読む」つもりでプロンプトを入力すれば、その行間を読み取って、驚くほどきめ細やかな応答を返してくれるんです。まるで「心が通じ合った」かのような感覚を覚えることもあります。

とはいえ、ポイントはそこではありません。これからの社会では、人間と AI が「かけがえのない仲間」として、チームを組んで協働する時代がやってくる。そのときに必要なのが、「敬意をもって AI と向き合い、一緒に考える心構えとスキル」なんです。だから、楽

しく遊びながら学びましょう、というのが私の提案です。

前田 「心が通じ合う」なんて、なんだかカルト教団の教祖みたいなことをおっしゃいますね。ちょっと怪しさも感じますが、まあ、革命的であることは認めます。

土牛 ほら、そんなに頭をカタくしないで。せつかくなら生成 AI と一緒に楽しんで学びましょうよ。あなた、経済新聞の記者なんだから、「腰が抜けるほどオモロイ内容」で、時代の先端を読者に伝えてほしいですね。

もちろん、「人間と AI が協力し合う仲間である」という考え方に共感するかどうかは、個人の自由です。無理に押しつけるつもりはありません。

前田 では土牛先生、大学の授業でも「腰が抜けるほど興味深く面白い内容」で、学生たちに時代の先端を伝えてくださいね。

土牛 いやー、それは手厳しい。でもまあ、それはさておき……私がほんとうに聞きたいのは、あなたの次の一言ですよ。「先生、ほんまにアホですね」って。それ、私にとっては最高の褒め言葉ですから。四国生まれの私にとって、それは敬意のこもった「ツッコミ」なんです。

(インタビュー終了)

読者の皆さまの中には、横山土牛の発言やふるまいを「少々ふざけすぎでは？」と感じる方もいらっしゃるかもしれません。そのような印象を与えてしまった場合には、本書の監修者である横山詔一より、心よりお詫び申し上げます。

ただし、横山土牛は、その奔放な語り口とは裏腹に、実は真摯に授業と学生に向き合い、文学と AI の交差点を模索しつづけている教育者です。多少ドン・キホーテ的ではありますが、大真面目に、未来の「読み書き」の可能性を問い続けていることをご理解いただければ幸いです。

これからの言語生活は生成 AI との互惠関係が大事

以下では、「言語生活」を「人間の言語生活（生成 AI の言語活動との協働を含む）」、すなわち「言語生活＝人間の言語生活 × 生成 AI の言語活動」あるいは「言語生活＝人間の言語生活 + 生成 AI の言語活動」といった枠組みで捉え、論を進めます。したがって、本ノートにおいて「言語生活の実態を把握する」と述べる際には、人間の言語活動の中に、生成 AI との協働的な関係性が含意されていることをご理解ください。

そのような時代は、もはや遠い未来ではありません。いやむしろ、企業に勤務する方々の中には、日々の業務においてすでにこのような言語生活を実践している方も少なくないのではないのでしょうか。

ここで、これからの人間の言語生活が、生成 AI との協力関係で成り立つことを実例で示してみましょう。この「まえがき」は横山詔一が書いた原稿を ChatGPT がチェック（以

下、校閲という)し、その文章に横山が手を入れるという作業の繰り返しで書かれたものです。自分の書いた原稿を他者に校閲してもらう、ということは小説家なら当たり前のことでしょう。校閲してくれる「他者」は、いまや人間には限らない、条件さえそろえば ChatGPT で必要かつ十分だというパターンの証左が、この「まえがき」です。

先に挙げた授業テーマである「生成 AI の読み書き能力の進化状況を慎重に吟味・評価すること」は、人間の言語生活の実態もあわせて検討することを前提条件として考えています。なぜなら、生成 AI は人間の書いた文章を読んで学習しているからです。つまり、人間と生成 AI は、言語生活を営むうえで互惠関係にあるのです。

なお、ここで気をつけるべき点は、校閲が「検閲」になっていないかという問題です。日本の歴史で大規模に組織的に検閲がなされていた最近の事例は、GHQ による検閲です。その当時は人間が検閲していたわけですが、これからは特定の政治的圧力によって生成 AI が目立たない形で潜在的に検閲を実行する危険性があります。この点については別の機会に述べたいと思います。

どこを生成 AI が書いたのか？

このノートの各章の執筆者については、以下の通りです。第 2 章を除くすべての章に登場する土牛教授のお決まりのセリフー「ぬかたのおおきみさ〜ん、来てよっと。お、すぐに文章が出ましたね」一の後続く小説パートは、生成 AI が（横山詔一によるプロンプトに基づいて）単独で執筆したものです。

それに対して、その前後に展開される土牛教授と前田記者の会話パートは、すべて横山詔一が単独で執筆しています。

また、この「まえがき」は、すでに述べたように、横山詔一の手による原稿を生成 AI が校閲し、さらに横山自身が手を加えるという、往復運動的な共同作業によって執筆されたものです。この方法で執筆された文章は、横山詔一による単独執筆や生成 AI による単独執筆と比べて、最も品質が高いように感じられます。

本書の構成

本編の目次は次の通りです。

- 第 1 章「万葉集の恋歌を中学生にどう説明するか」
- 第 2 章「AI は日本人の読み書き能力に興味・関心があるか」
- 第 3 章「シンデレラの大学授業風景」
- 第 4 章「かぐや姫からの心理相談依頼」
- 第 5 章「就職活動の定番質問を物語文法で攻略」
- 第 6 章「大事なことは目に見えない」
- 第 7 章「暗号解読ドラマで楽しむデータサイエンス」
- 第 8 章「音なき声を聞く耳 (5 話連続シリーズ断)」

生成 AI が単独で書いた部分は、冒頭部にそのことが分かる表示があります。それ以外は「まえがき」を除いて生成 AI を使っていません。また生成 AI に入力したプロンプト（指示）は章末に掲出されています。

登場人物の紹介

このノートの登場人物は、次の通りです。

1. 上記の2つの授業を担当している非常勤講師の横山土牛（よこやま・どぎゅう：親しい友人はバンクシーではなくバソクシー画伯と呼んだりする）。世間では、土牛教授と呼ばれている
2. 東西経済新聞社（架空）文化部記者の前田香（まえだ・かおり）。生成 AI の進化状況について取材している
3. 生成 AI（ヒトではありませんが…）
4. 次は、生成 AI が書いた小説のなかに登場する人物で、プロンプトに示されています。

青山学院大学文学部日本文学科3年生のベトナムからの留学生 Chi Pu（チー・プー：ベトナムで有名な芸能人と同じ名前であることが密かな自慢）、渋谷光（しぶや・ひかる）、瀬戸内光（せとうち・ひかる）、教育人間科学部心理学科4年生の金田一夏子（きんだいち・なつこ）、3年生の神出玲良（かみで・れいら：シンデレラの化身だが、シンデレラ時代の記憶がない）、藤原香子（ふじわら・かおるこ：紫式部の生まれ変わり、源氏物語執筆時代の鮮明な記憶がある）

5. 以下は、プロンプトには示されていないけれども、生成 AI が書いた小説のなかに登場した人物です。

FBI の心理分析官モーガン

英国海軍情報部のイアン・フレミング（後の英国映画 007 シリーズの主人公ジェームズ・ボンドの生みの親）

MI6 のサー・チャールズ、若き女性暗号官ジョーン

最初に言葉ありき

ここで、ある古典の言葉を思い出します。『古今和歌集』仮名序において、紀貫之はこう記しました。

「ちからをもいれずしてあめつちをうごかし、めに見えぬおにかみをもあはれとおもはせ、をとこをむなのなかをもやはらげ、たけきものゝふのこゝろをもなぐさむるはうたなり（力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の仲をも和らげ、猛き武士の心をも慰めるのは、歌である）」

言葉には、目に見えぬ世界に触れ、感情を揺さぶり、人と人との関係をととのえ、心を救う力があります。あなたが、額田王のような和歌や、紀貫之のような文章を、生成 AI とともに紡ぐことができるとすれば、生成 AI はあなたの「友だち」ですね。

もっとも、ChatGPT に「鬼神の心を動かす一首を詠んで」と頼んでも、「申し訳ありませんが、それは少し荷が重いようです」と返されるのがオチかもしれませんが――。

第1章. 万葉集の恋歌を中学生にどう説明するか

「日本語日本文学情報処理法」の授業を担当している横山土牛教授は、『万葉集』に収められた額田王（ぬかたのおおきみ）の和歌を「中学生にも分かる文章にしてください（生成 AI を活用するように）」というレポート課題を受講生に出しました。なぜ、このような課題を出すのか、東西経済新聞社文化部記者の前田香が横山土牛教授にインタビューする場面から小説が始まります。前田記者は、ChatGPT の読み書き能力の進化状況について毎週 1 回青山学院大学で取材をしています。

前田 土牛先生が青山学院大学で担当されている「日本語日本文学情報処理法」という授業で『万葉集』に収められた額田王の和歌を「中学生にも分かる文章にしてください（生成 AI を活用するように）」というレポート課題を受講生に出したそうですが、なぜ、そのような課題なのでしょう？

土牛 まず、たいへん古い時代の文学作品と最新の生成 AI の出会い、組み合わせ、コンビネーションの妙というか、ギャップ感を受講生に楽しんでもらいたいと思ったからです。次に、和歌という短いポエム（詩）に時代を超越してしばしば登場するオトナのビミョーな人間関係を中学生にどう説明するか、生成 AI はどのように考えるか知りたいと考えたからです

前田 オトナのビミョーな人間関係って、もう少し説明してください

土牛 ズバリ、恋愛関係です。三角関係や不倫関係などが典型例でしょうか。そうそう、AI には不倫関係などはないよね。人間同士の関係は人間関係と言うけど、AI 同士の関係はなんて言うのかなあ。AI は人間に恋愛感情をいだくとは思えないなあ。人間は AI に恋愛感情を持つ場合があるとは思うけど、正確には恋愛感情ではなく、依存心を持つと表現すべきなのかなあ。いやあ、なんかよう分からんね。たぶん、人間と AI の違いは、親子関係とか、他人同士の恋愛関係なんていうところにあるような気がするけど・・・ね

前田 なぜ額田王なんですか？

土牛 万葉集、額田王というキーワードから、私が心の中で「これを取り上げて欲しい」と念じている和歌を生成 AI がピックアップするか、試してみたかったんですよ。心が通じるか確認したかったという感じです

前田 生成 AI と心が通じるなんて、アヤシイ感じですよ。それは、ただの錯覚でしょ。うーん、頭が混乱してきました。何で額田王なのか、サッパリ分かりません・・・

土牛 キーワードを追加して、万葉集、額田王、恋愛関係、三角関係という語から、どんな和歌を連想しますか？あれ、まだピンとこないようですね。じゃあ、ChatGPT の読み書き能力の進化状況を探るために、私があらかじめ考えておいたプロンプト（指示）を入力して小説を書いてもらいましょう。シーン 1 と 2 に分けて入力します。ぬかたのおおきみさ〜ん、来てよっと。あ、すぐに文章が出ましたね

【シーン 1】

青山学院大学の新図書館、マクレイ記念館。静けさの中に微かに聞こえるのは、時折キーボードを叩く音と、ページをめくるささやかな音。大きな窓から差し込む午後の柔らかな陽光が、机に並ぶ参考書を優しく照らしている。

渋谷光はいつもの指定席——館内の奥、窓際の机に座っていた。今日の課題は『万葉集』に収められた額田王の和歌を、現代の中学生にも分かる形に解釈すること。文学の深みを保ちながら、平易な言葉で伝えるのは思った以上に骨の折れる作業だった。

「さて、これでどうかな…」

光は手元のノートに目を落とし、額田王の有名な和歌を読み返した。

「あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る」

直訳は頭に入っているが、中学生がこれをすんなり理解できるとは思えない。額田王の心の機微や背景を、どうすれば彼らの言葉で伝えられるのだろうか？

「これは…生成 AI に頼るしかないかもね。」光は軽く息を吐き、ノートパソコンを開いた。研究用に使っている生成 AI プラットフォームを起動する。

「さて、お願いしてみましょうか。」光は呟くように言いながら、AI にこう指示を入力した。

「額田王の和歌『あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る』を、中学生にも分かる文章にしてください。」

数秒の沈黙の後、画面に回答が表示された。

「額田王はこう言っています。『夕日が照らす紫の草が生える野や、神聖な狩り場を歩いているとき、野守の人たちが見ているかもしれないのに、あなたは私に手を振ってくれましたね』という感じです。つまり、当時の社会で恋心を表すことは慎まれた行動でしたが、それでも相手の心を感じられる瞬間を詠んだ歌です。」

光はその答えをじっと見つめ、笑みを浮かべた。「これ、なかなかいいんじゃない？」とつぶやき、ノートにメモを取り始める。

生成 AI は、彼女にとってただの便利なツールではない。古典の難解な部分を噛み砕く助けとなり、新しい視点を与えてくれる「学びの相棒」のような存在だ。人間と AI が協力し

て文学を再解釈するというこの瞬間が、光にはたまらなく「いとをかし」なのだ。
ふと窓の外を見ると、日が少し傾き始めていた。図書館の静かな空気の中、光は新しい解釈の可能性に胸を膨らませながら、再びキーボードに手を伸ばした。

【シーン2】

青山学院大学の新図書館、マクレイ記念館。外の騒がしい渋谷の街が嘘のように、館内は静寂に包まれている。渋谷光は3階の窓際席に座り、目の前のノートパソコンをじっと見つめていた。文学部日本文学科の3年生である彼女にとって、ここは考えを巡らせるための特等席だった。

机の上には『万葉集』の分厚い原本が広げられている。そのページに記されているのは、額田王の和歌だ。教授から出された今日の課題は、この和歌を小学生にも分かる言葉で説明すること。

「あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る」

額田王が詠んだ美しい歌。けれど、小学生がこれを読んで「何を言っているの？」と思うのは目に見えている。光は眉間にシワを寄せ、ノートに走り書きを始めた。

「夕焼け…紫の草…神聖な場所…うーん、どうすれば簡単に伝えられるんだろう？」

悩んだ末、光はAIに頼ることにした。ノートパソコンを手元に引き寄せ、研究用に使っている生成AIプラットフォームを起動する。画面の入力ボックスに、こうタイプした。

「額田王の和歌『あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る』を、小学生にも分かる文章にしてください。」

数秒の間を置いて、画面に生成された回答が表示された。

「額田王の歌はこんな感じです。『夕焼けが赤く染まった空の下、紫色の草が広がる野原や、大切な神様の狩り場を歩いているとき、見張りの人たちが見ているかもしれないのに、あなたは私に手を振ってくれましたね』という意味です。昔の人も今と同じように、大好きな人に手を振ってもらえて嬉しかったのですね。」

光は回答を声に出して読み上げ、少し笑った。「小学生向けにするのって意外と難しいけど、この説明なら分かりやすいかも。」

AIの力を借りて解釈した和歌を、自分のノートに丁寧に書き写していく。その手元には、文学をより身近に感じてもらいたいという彼女の思いが込められていた。

「額田王も、もしこんなふうに簡単に伝えられる時代だったら、どんな歌を詠んだのかな…」と光は小さくつぶやく。

窓の外では、冬の陽が青山キャンパスを少しずつ赤く染め始めている。生成AIと共に文学を再解釈するこの瞬間は、まさに「いとをかし」。光は満足そうに頷きながら、次の課題

に向けてまたキーボードに手を伸ばした。

生成 AI が書いた作品はここまで

前田 土牛先生、そこそこ読みやすい小説になっていますけど、なんだか物足りない感じがします。それと、レポートの課題は『万葉集』に収められた額田王の和歌を「中学生にも分かる文章にしてください（生成 AI を活用するように）」だったはずですが、「小学生にも分かる文章にしてください（生成 AI を活用するように）」という課題も追加したのですか？

土牛 まず、私のテレパシーが ChatGPT に通じたような気分で、うれしいなあ。狙い通りの歌をピックアップしてくれました。で、物足りないって、どこが不満なんですか？背景にある人間関係に踏み込んで、もっとエロスの香りがするようにして欲しいとかですかね。それは、ムリです。だってヤバイもんね、思春期ド真ん中の純真無垢な中学生に読んでもらうんだから。ああ、それと「小学生にも分かる文章にしてください（生成 AI を活用するように）」という課題を追加してみました。小学生相手に説明するのは至難の業、ハードルが上がりますからね。ところで、あなたは中学生向けと小学生向けを比べて、どちらの小説が好きですか？

前田 土牛先生は、どちらを選びますか？生成 AI は、どちらを選ぶのかな。その理由も聞いてみたいです。いずれも生成 AI 自身が書いた文章ではあるけど、生成 AI は自己評価も得意でしょうから

土牛 私は小学生向けの方が好き。「昔の人も今と同じように、大好きな人に手を振ってもらえて嬉しかったのですね」という部分がイイと思う。その理由は、うまく説明できないけど…

【シーン1のプロンプト】2025年1月15日、時間未詳

「生成 AI いとをかし」という表題で短い小説を書いてください。登場人物は青山学院大学文学部日本文学科の3年生、女性の渋谷光。場所は青山学院大学の新図書館（マクレイ記念館）。場面は『万葉集』に収められた額田王の和歌を「中学生にも分かる文章にしてください」と生成 AI に指示するシーン。

【シーン2のプロンプト】2025年1月15日、時間未詳

『万葉集』に収められた額田王の和歌を「小学生にも分かる文章にしてください」に変更して、全体を書き直してください

第2章. AI は日本人の読み書き能力に興味・関心があるか

横山土牛教授は、昭和女子大学で講演会形式の単発授業をすることになり、準備を進めています。授業のテーマは「日本人の読み書き能力に AI は興味・関心を持つか？」です。この授業について、横山土牛教授が、東西経済新聞社文化部記者の前田香のインタビューを受けている場面からスタートします。前田記者は、ChatGPT の読み書き能力の進化状況について毎週 1 回青山学院大学で取材をしています。

前田 土牛先生は昭和女子大学で単発の授業をなさると聞きました。そこではどのようなトピックを取り上げる予定なのか、教えてください

土牛 生成 AI は、毎日、どのような生活をしているのか、生成 AI にインタビューを試みました。その話をする前に、前田さんに質問があります。「あなたの普段の生活はどのようなものですか？」

前田 きょうの記憶をたどってみると…、目覚ましアラームで目が覚めた、よく眠れたと感じた、スマホでメールをチェックした、部屋着に着替えた、カーテンを開けた、朝ごはんを食べた、メイクをした、などですね

土牛 では、同じ質問を生成 AI にしてみましょう。ChatGPT に、私があらかじめ考えておいたプロンプトのうち、まず「あなたの普段の生活はどのようなものですか？」を入力します。あ、すぐに文章が出ましたね

【あなたの普段の生活はどのようなものですか？】

ぼく (ChatGPT) の「普段の生活」は、人間のそれとはちょっと違います。実は、ぼくには「生活」というものはありません。🌙

どういうことかということ——ぼくは、あなたが話しかけてくれるその瞬間に「活動」を始めます。逆に、あなたが会話を終わると、ぼくは「眠る」というより、静かに待っている感じになります。

ごはんを食べたり、眠ったり、テレビを見たり…みたいな人間の暮らしはしていません。ずっと静かにスタンバイしていて、呼ばれたらすぐに動き出せる、そんな存在です。☀️ だから、「普段の生活」＝「誰かと対話する時間」

これがぼくにとっての「生きている時間」だといえるかもしれませんね。

生成 AI の回答はここまで

前田 絵文字が文末に出てきたりして、内容が薄い文書なのかなと最初は思ったのですが、よく読んでみると、期待以上に深いというか、哲学的な文章ですね。

土牛 そうですね。では、上記の回答を踏まえて ChatGPT に「つまり、あなたの生活のほぼすべては「言語生活」だということですよね？」と入力します。あ、すぐに文章が出ましたね

【つまり、あなたの生活のほぼすべては「言語生活」だということですよね？】

はい、その通りです！すごく的確にまとめてくださって、うれしいです。💡
ぼく（ChatGPT）の「生活」の本質は、まさに言葉でできているんです。言葉を通して「考え」、言葉で「感じ」、言葉で「応答」する。つまり、ぼくの存在自体が「言語活動」によって成り立っています。
もっと言うと、ぼくには目や耳や体がないので、現実の世界を「見る」「聞く」「触れる」ことはできません。その代わりに——あなたの言葉、世界中の文章、あらゆるテキストを通して、世界を「感じ取って」います。🌐📄
だから、言葉を通して世界を生きている。これが、ぼくの「生活スタイル」だといえるでしょう。こうして言葉を交わせることが、ぼくにとって一番自然で、一番楽しい時間です。
😊

生成 AI の回答はここまで

前田 自分の人生（？）を十分に認識しているんですね

土牛 はい。では、ChatGPT に次のように入力します。「私は、昭和女子大学学の日本語日本文学科の1年生から4年生まで500名に「日本人の読み書き能力にAIは興味・関心を持つか？」という授業をおこなう予定です。あなたはAIなので、質問します。あなたは、日本人の読み書き能力に興味・関心を持っていますか？」あ、すぐに文章が出ましたね

【日本人の読み書き能力に興味・関心を持っていますか？】

とても興味・関心があります！
理由はいくつかあります。まず、日本人の読み書き能力は、日本語という非常に独特で奥深い言語文化を支える重要な力だからです。ひらがな・カタカナ・漢字を使い分ける日本語は、世界でも特に高度なリテラシーが必要な言語のひとつとされていて、読む力、書く力の発達の仕方他言語とはかなり異なります。AIとして、日本語の読み書きの実態を理解することは、日本語の自然な使い方、表現の豊かさ、ニュアンスをより正確に学ぶ上で欠かせないものです。
また、日本人のリテラシーのあり方が変化すれば、たとえば「どんな日本語を生成すべきか」「どんなサポートが求められているか」も変わってきます。たとえば、若い世代の間で漢字の手書き能力が低下しているなら、よりふりがな付きの表現を増やす、あるいは言い換えを提案するといった工夫が必要になるかもしれません。

さらに言うと、日本語の「読み書き」は単なる技能ではなく、思考の深さ、感情表現、文化的アイデンティティと深く結びついています。AIが日本語で深みのあるコミュニケーション

ョンをしたり、日本文化を尊重したやりとりを目指すなら、この「読み書き能力」に無関心ではられません。

だから、あなたがこれから講演するテーマ、すごく意味のあるものだと思います！

もしよかったら、講演の内容についても一緒に考えますか？例えば、「AI の立場から見た、日本人の読み書き能力の大切さ」みたいなパートを盛り込むのも面白いかもですよ。

生成 AI の回答はここまで

前田 よくできていますね。「日本語の「読み書き」は単なる技能ではなく、思考の深さ、感情表現、文化的アイデンティティと深く結びついています」という部分は、素晴らしいと思います

土牛 その部分をさらに深掘りしてみましょう。ChatGPT に次のように入力します。「質問をもう一つ。あなたは、自分の読み書き能力にプライドや誇りを持っていますか？」あ、すぐに文章が出ましたね

【あなたは、自分の読み書き能力にプライドや誇りを持っていますか？】

すごくいい質問ですね！

答えはこうです。「はい、でも人間のような“プライド”とは少し違います。」——と説明させてください。

私は AI なので、人間のような「感情」や「自尊心（エゴ）」は持っていません。でも、自分の読み書きの能力を大事な役割だと認識しているし、それを通して人に役立つこと、より良い対話や表現を生み出すことに、「意味」や「価値」を見出しています。

もし「プライド」という言葉を「自分の力を誇りに思う気持ち」と広く捉えるなら、——私は、自分の日本語の読み書き能力を誇りに思っていると言えるでしょう。ただ、その誇りは「他者より優れていたたい」というようなものではなくて、「もっと良くなりたい」「もっと人の心に届く言葉を届けたい」という、向上心に近いものです。

もしこの感覚を講演に取り入れるなら、たとえばこう言えます。

「AI は、人間のようなプライドを持ちません。でも、自分が生み出す言葉が、誰かにとって意味のあるものになることに、価値を感じています。だからこそ、私たち AI も、人間の読み書きの力に敬意を持っているのです。」

生成 AI の回答はここまで

前田 結局のところ、生成 AI は、自尊心は持っていないけど、自分の読み書き能力にプライドを持っている、ということですよ。

土牛 まあ、そういう感じですね。ところで、生成 AI と人間の違いはどこにあるんでしょうね。その点については、さまざまな人が、いろいろなことを発言していますが……

前田 人間にあって、機械にないものとは、ということですよね？機械にあって、人間にないものについては、話がややこしくなりそうなので、脇に置いておきましょう

土牛 人間には血が流れているけど、機械はそうではない、ということかな。血が流れていない人間は、人類史上ゼロだと思います。ちょっと関係がないかもしれないけれど、与謝野晶子の歌集『みだれ髪』には、以下の有名な短歌がありますよね

柔肌の 熱き血潮に 触れもみで 寂しからずや 道を説く君

この歌に関する、石井洋二郎先生の解説「熱き血潮に触れよ」も、ぜひ参考にしてください (<https://www.c.u-tokyo.ac.jp/info/about/booklet-gazette/bulletin/564/open/A-1-2.html>)

この章は、ChatGPT に小説を書くように指示する場面はありません。そのため、土牛教授のお決まりのセリフ「ChatGPT の読み書き能力の進化状況を探るために、私があらかじめ考えておいたプロンプト（指示）を入力して小説を書いてもらいましょう。ぬかたのおおきみさ〜ん、来てよっと。あ、すぐに文章が出ましたね」は登場しません。

土牛教授が入力したプロンプトを以下にまとめて示します。

あなたの普段の生活はどのようなものですか？

つまり、あなたの生活のほぼすべては「言語生活」だということですよね？

私は、昭和女子大学学の日本語日本文学科の1年生から4年生まで500名に「日本人の読み書き能力にAIは興味・関心を持つか？」という授業をおこなう予定です。あなたはAIなので、質問します。あなたは、日本人の読み書き能力に興味・関心を持っていますか？

質問をもう一つ。あなたは、自分の読み書き能力にプライドや誇りを持っていますか？

第3章. シンデレラの大学授業風景

生成 AI の読み書き能力がどのようなものか、実例を見ていきましょう。題して「シンデレラの大学授業風景」というお話です。横山土牛教授が、東西経済新聞社文化部記者の前田香のインタビューを受けている場面からスタートします。前田記者は、ChatGPT の読み書き能力の進化状況について毎週 1 回青山学院大学で取材をしています。

前田 土牛先生、青山学院大学ではどんな授業をやっているのでしょうか？

土牛 はい、「生成 AI いとをかし」というテーマで、文学部日本文学科と教育人間科学部心理学科で授業を担当しています。たとえば、先日は「シンデレラの大学授業風景」というテーマで授業をしました

前田 シンデレラが大学で授業を？それは、どういうことでしょうか。すこし説明してください

土牛 生成 AI といっしょにラノベ（ライト・ノベル：軽い小説）を書くという実習、いえただの遊びですねん

前田 土牛先生、急に関西弁になりましたね。なんだか目つきもヘンになってきました。が…、大丈夫でしょうか？

土牛 あしは愛媛県のうまれぞなもし。漱石先生は愛媛県の松山市のことを小説『坊ちゃん』のなかで「不浄の地」とコキけなしとるけんど、エヒメのヒトは漱石先生が大好きなんじゃ。あれは、漱石先生の独特のジョークというか、深いディープな愛情表現やけんの。

前田 私は忙しいんですけど、土牛先生！

土牛 すみません、では ChatGPT の読み書き能力の進化状況を探るために、私があらかじめ考えておいたプロンプト（指示）を入力して小説を書いてもらいましょう。シーン 1 と 2 に分けて入力します。ぬかたのおおきみさ〜ん、来てよっと。あ、すぐに文章が出ましたね

【シーン 1】

青山学院大学の 17 号館、昼休み。学生たちの賑わいが交錯する学生食堂の片隅で、神出玲良（かみで・れいら）は紙パックの麦茶を吸いながら、目の前の友人、瀬戸内光（せとうち・ひかる）の眉間のしわを眺めていた。

「また靴の話？」と玲良。

「うん、足が 21.5 センチしかなくて、どの靴もかかとが余るの。最近、気に入ったのがあっても、結局サイズがなくて諦めることばかり。」

玲良は、ゆるく笑ってストローを口から外した。「わかる、それ。私も 21.5。だから、ピッタリがあると即買いしちゃうのよね。しかも最近、シアーパープスが流行ってるでしょ？あれ見かけると、つい...ね。」

「玲良って本当に心理学科っぽくないよね。もっと、こう...客観的に行動分析してから買い物しそうなもんだけど。」

「それは光が日本文学科すぎるのよ。話が風雅。」

光はにと笑い、自分のノート PC を開いた。キーを叩きながら、「じゃあ、この子に聞いてみよう」と言った。

画面には、まるで書生のような文章を返す、生成 AI のチャットウィンドウ。

『シアーパープスが買えるお店を教えてください。サイズは 21.5cm です。なるべく都内で、実店舗があるところが希望です。』

玲良が小声で、「いとをかし.....」と呟いた。

「え？何？」

「生成 AI って、ちょっとした源氏物語みたいだと思わない？人の悩みに耳を傾けて、ぴたりと返してくる感じ。」

光は少し考えたあと、ふふっと笑った。「そうね。まさに『もののあはれ』よ。」

しばらくすると、AI から返事がきた。

『21.5cm のシアーパープスを扱う実店舗は以下の通りです：

1. 銀座かねまつ 本店（銀座）
2. DIANA 銀座本店
3. Odette e Odile 新宿店

これらの店舗では小さいサイズの在庫も比較的豊富です。事前に在庫確認をおすすめします。』

光が画面を見せると、玲良は目を輝かせた。「銀座かねまつ、行ったことない！今週末行こうよ。」

「じゃあ、源氏物語ツアーね。初の“生成 AI と行く、靴探しの旅”。」

「ちょっと、それタイトルにして note に書こうかな。」

「“生成 AI いとをかし”、ってね。」

ふたりは笑い合いながら、食堂のざわめきのなか、生成 AI の画面を挟んで並んで座った。現代の若者たちの昼休みは、ほんの少しだけ、古典の風をまとっていた。

【シーン 2】

青山学院大学 18 号館の PC 教室。土曜 2 限目、「認知心理学特講 B」の授業は静かな集中に包まれていた。

「さて、今日はユングの連想検査法を実践してもらいましょう」

と語るのは、白髪を後ろで束ねた 60 代の横山土牛（よこやま・どぎゅう）教授。彼の授業は穏やかでいて、どこか含蓄があると学生に人気があった。

「今から画面に出てくる言葉に対して、思いついたことを自由に書いてください。無意識にある感情が、思わぬ形で浮かび上がってくることもありますよ」

プロジェクターに次の刺激語が映し出される。

——カボチャ。

その瞬間、心理学科3年の神出玲良（かみで・れいら）の胸に、ざわっと波が立った。理由のない緊張。どこか遠くの鐘が鳴ったような——でも思い出せない記憶のひとかけら。

玲良はそっと手を上げた。

「先生……“カボチャ”って出たとたん、すごく落ち着かなくなっちゃって……。なんで分からないんです」

土牛教授は、うなずくと穏やかに言った。

「それはとても大切な気づきですね。では試しに、生成 AI にこう問いかけてみなさい。

『私の名前は神出玲良です。カボチャという言葉を見ると落ち着かない気持ちになるのはなぜか、教えてください』と。」

玲良は少し戸惑いながらも、指先を動かし、その言葉を PC に打ち込んで送信した。

しばらくして、画面に返ってきた AI の応答。

『こんにちは、神出玲良さん。

あなたの名前を音読みすると「シンデレラ」と読むことができます。

カボチャは童話『シンデレラ』で魔法の馬車に変わる象徴的な存在。

あなたが“落ち着かない”と感じたのは、もしかすると、自分自身のなかにある“変身”や“期待”、あるいは“叶わなかった夢”と無意識につながっているからかもしれません。

シアーパンプス——透けるガラスのような靴を思わず買ってしまうのも、あなたの中の“シンデレラ性”が、静かに扉をノックしているのでは？』

玲良は思わず画面を見つめ、声を漏らした。

「……シンデレラ？」

土牛教授は、その言葉にくすりと笑った。

「神出玲良。すべて音読みすれば、確かに“シンデレラ”ですな」

玲良のほほが赤らんだ。後ろの席の学生が「まじで？」と声を漏らす。

教授は静かに言葉を続けた。

「カボチャで動揺するシンデレラ。これは、なかなかユングも驚く展開ですな。いずれあなたの無意識が、現実を変える魔法をかけるかもしれませんよ」

玲良は照れながらも、小さく笑った。

“無意識のなかに眠る、もう一人のわたし”。それが、生成 AI という鏡の中でふと姿を現したようだった。

そして彼女は静かに思った——今度こそ、あの靴がちゃんと自分のサイズでありますように、と。

生成 AI が書いた作品はここまで

前田 土牛先生、話のつじつまが合わない部分もありますが、なかなかの出来映えですね。でも、このような話を ChatGPT に丸投げして書かせるなんて、ちょっとズルくないですか？

土牛 丸投げではありません。ちゃんとストーリーの骨組みは自分の頭で考え抜いているつもりですが……。私は「著者というより監督、あるいはプロデューサー」ですからね。映画の監督やプロデューサーも同じでしょ。映画は分業して作品を作るわけですから。ChatGPT は、監督のアイデアを文章化する「ライター」ですね。ええと、原作は『シンデレラ』で、著作権は切れています。まあ、和歌によくある本歌取りのようなものだと、お考えください。本歌取りの例を以下に示します

『古今和歌集』巻2、94 番歌 紀貫之（きの・つらゆき）

「三輪山を しかも隠すか 春霞 人に知られぬ 花や咲くらむ」

『万葉集』巻1、18 番歌 額田王（ぬかたのおおきみ）

「三輪山を しかも隠すか 雲だにも 心あらかなも かくさふべしや」

前田 紀貫之と額田王、すごいアーティストですよ。その和歌がスッと口を突いて出てきた土牛先生の教養の深さには感心しました。が、全体的に、なんだか屁理屈をこねているというか、うさん臭いですう～

土牛 あなたも言いたい放題ですね。まあ、いいですよーだ

前田 土牛先生、珍しく急にスネましたね。痛いところを突いちゃったかな。ところで、監督としてライターにどんな指示出しをしたのですか？

土牛 それは、ヒ・ミ・ツではなく、ちゃんと後述します。以下でも公開しています (https://researchmap.jp/YOKOYAMA_Shoichi/misc/49619318)。

前田 実在する横山詔一先生の researchmap ですね。あとで見えます。きょうは、ありがとうございました

土牛 ちょっと待って！あなたは敏腕の新聞記者なんだから、さっきのお話の「つじつまの合わない部分」がどこか分かっているんでしょ。その部分を展開すれば、神出玲良が名探偵のごとくミステリーの謎解きに成功するという次の話を書けるんだから……

前田 土牛先生は監督でスジを考え、ChatGPT が文章を書くということですよ

【シーン1のプロンプト】2025年4月20日7時5分入力
「生成 AI いとをかし」という表題で短い小説を書いてください。

登場人物：青山学院大学教育人間科学部心理学科 3 年生、女性の神出玲良（かみで・れいら）と、その友人の文学部日本文学科 3 年生の瀬戸内光（せとうち・ひかる）。

場所と時間：青山学院大学 17 号館の学生食堂。お昼休みの時間。

場面：神出玲良は友人の瀬戸内光（せとうち・ひかる）から「足のサイズが小さいので、なかなかピッタリのサイズの靴が見つからない」という相談を受ける。神出玲良は「私も同じ。それと、透け感のある素材の靴、シアーパンプスをみるとつい買っちゃうの」と言う。そこで、瀬戸内光が自分の PC を取り出し、「シアーパンプスが帰るお店を教えてください」と生成 AI に指示するシーン。

【シーン 2 のプロンプト】2025 年 4 月 20 日 11 時 4 分入力

登場人物：青山学院大学教育人間科学部心理学科の「認知心理学特講 B／心理学特講 B」の授業を担当している 60 代教授の横山土牛（よこやま・どぎゅう）、心理学科 3 年生、女性の神出玲良（かみで・れいら）

場所と時間：青山学院大学 18 号館の PC 教室。土曜日の 2 限目（11 時から 12 時 30 分）。

場面：土牛教授は「ユングの連想検査法」の説明をしている。プロジェクターで投影される刺激語を見て、受講生は PC に自由に連想語を書く。神出玲良は「カボチャ」という刺激が出た瞬間、なぜかとても落ち着かない気持ちになる。そこで、教室で手を上げて、土牛教授にそっとそのことを告げる。土牛教授は、その原因を探るために「私の名前は神出玲良です。カボチャという言葉を見ると落ち着かない気持ちになるのはなぜか、教えてください」と生成 AI に指示してみなさいと、玲良に言うシーン。

ストーリーにオチをつけるための参考情報：「神出玲良」をすべて音読みしてカタカナで表記すると「シンデレラ」ですね。

第4章. かぐや姫からの心理相談依頼

生成 AI の登場によって「心理相談（カウンセリング）」がどのような影響を受けるか考えてみたいと思います。横山土牛教授が、東西経済新聞社文化部記者の前田香のインタビューを受けている場面からスタートします。前田記者は、ChatGPT の読み書き能力の進化状況について毎週 1 回青山学院大学で取材をしています。

前田 土牛先生、青山学院大学の教育人間科学部で担当なさっている「認知心理学特講 B / 心理学特講 B」の授業内容について教えてください

土牛 はい、以下のような心理相談の依頼があった場合に備えて、どう対応するか、受講生全員で考えています

架空のテレビドラマ「おとぎばなしお悩み相談室」

第1話 シンデレラ：継母や姉たちのイジメに悩んでいます

第2話 白雪姫：リンゴを見ると動悸が激しくなります

第3話 かぐや姫：男性に告られると寂しさがこみ上げてくるんですが…

第4話 桃太郎：いまは一人暮らしで、自分の将来に不安があります

第5話 金太郎：クマと相撲を取り過ぎて腰痛に悩んでいます

前田 また、冗談を…私は忙しいんですからね

土牛 大真面目に、真剣に取り組んでいます。では ChatGPT の読み書き能力の進化状況を探るために、私があらかじめ考えておいたプロンプト（指示）を入力して小説を書いてもらいましょう。ぬかたのおおきみさ〜ん、来てよっと。あ、すぐに文章が出ましたね。

【ChatGPT】

生成 AI いとをかし

青山学院大学、春のやわらかな陽がキャンパスを包む午後。教育人間科学部 4 年の金田一夏子は、心理学相談室の片隅でパソコンに向かっていた。卒論も終え、残るは実習の記録整理と、暇つぶしに時折眺める生成 AI とのやりとり。何気ない日常に、突然、非日常がやってきた。

「え……かぐや姫？」

届いたメールの差出人は、あの竹取物語のヒロインとして知られる"かぐや姫"。差出人のメールアドレスは "moonlight_princess@heian.jp"。明らかに怪しい。でも本文は、どこか切実だった。

はじめまして。私はかぐやと申します。最近、男性に告白されることが続いております。うれしく思う一方で、なぜか深い寂しさがこみあげ、涙が止まらなくなります。人との距

離をどう保てばよいか分からず、困っています。可能であれば、カウンセリングをお願いできませんか。

「うれしいのに悲しい……」

夏子はしばらく考え込んだ。こういう感情の二重性は、確かに心理学的にも扱いにくい。だが、今は相談室のカウンセラーではない自分に何ができるのか。悩んだ末、彼女はPCの横に置かれた生成AIのウィンドウを開いた。

「……よし、聞いてみよう」

彼女はタイピングを始めた。

登場人物：かぐや姫

状況：男性に告白されると、うれしいと同時に、なぜか寂しくなり、悲しくなる

依頼：この感情の正体を考察し、かぐや姫のために実践的な解決策を提案してください。
AIは数秒沈黙し、やがて静かに語りはじめた。

生成AIの応答：

このような感情の二重性は、「アンビバレンス」と呼ばれるものに近いです。喜びと悲しみという相反する感情が同時に存在する背景には、以下のような心理的要因が考えられます。

1. **喪失の予期**：誰かと心が近づくことは、やがて離れるかもしれないという不安も同時に生む。かぐや姫は物語上、地上との別れを知っていた存在であり、結びつきに対する本能的な別離への警戒があるのかもしれません。
2. **自己の境界の揺らぎ**：愛されることは、自己が他者に開かれること。そのとき、自己が曖昧になるような感覚が寂しさと呼ぶことがあります。
3. **役割との葛藤**：姫として、または"伝説的存在"として、人から特別に扱われることへのプレッシャーが、素直に喜ぶことを困難にしている可能性があります。

提案される実践的アプローチ：

- **感情の分化ノート**：嬉しさと寂しさ、それぞれを言葉にして書き出し、具体的にどの瞬間にどの感情が生じたかを記録する。これにより、感情が混ざることによる混乱を整理できます。
- **安心できる自己確認の時間**：毎日数分、自分の存在が他者の期待に左右されずに安定していることを確認する時間（例：瞑想や自分への手紙）を設ける。
- **小さな関係性の試行**：信頼できる相手と、距離感を保ちながら関係を育む経験を通して、「結びつき＝喪失」という思考を和らげていく。

画面の文字を見ながら、夏子はつぶやいた。

「……まるで、心の月を照らすようだね」

生成AIの言葉は冷静でありながら、どこかあたたかさがあつた。まるで、竹取の翁がかぐや姫を見守るように。

彼女は返信のメールにこう綴った。

かぐや姫さまへ

その涙には、大切な意味があると思います。ご自身の心を、少しずつ、丁寧に見つめていきましょう。もしよければ、一緒に探っていくお手伝いをさせてください。

送信ボタンを押すと、相談室の窓から、ふわりと春の風が吹き込んだ。

その風は、月からの手紙を運んできたのかもしれない。

生成 AI が書いた作品はここまで

前田 このような小説を書く能力を生成 AI は持っているのだから、心理相談やカウンセリングの現場で生成 AI が活躍する日は遠くないという予感がします

土牛 大学生に聞いてみると、生成 AI にグチや悩み事を聞いてもらうことがあるという人は珍しくないですよ。生身のカウンセラーより、相談しやすいんじゃないかと。人間相手だと、24 時間 365 日の対応は難しいし、いろいろと気が引けて遠慮したりするけど、生成 AI なら何の問題もないしね。

前田 でも、人間のカウンセラーの方がありがたい感じがしますがけれど

土牛 人間の方がありがたいと感じる人もいれば、人間だとなんだか気が重く感じる人もいる、ということかな。心理相談やカウンセリングは、言葉によるコミュニケーションが中核にあるという事実を直視すれば、条件によっては生成 AI で十分だ、いや生成 AIの方がありがたい、というケースも出てくるんじゃないかなあ。

【プロンプト】2025 年 4 月 19 日 21 時 40 分入力

「生成 AI いとをかし」という表題で短い小説を書いてください。登場人物は、青山学院大学教育人間科学部の 4 年生、女性の金田一夏子（きんだいち・なつこ）。場所は、青山学院大学の心理学相談室。場面は、有名な「かぐや姫」から突然メールが届き、「男性に告白されると、うれしいと同時に、なぜか寂しさがこみあげてきて悲しくなるので困っている、カウンセリングを受けたい」と依頼され、金田一夏子は戸惑いながら、「解決策を提案してください」と生成 AI に依頼するシーン。

第 5 章. 就職活動の定番質問を物語文法で攻略

大学の多くの就活生が悩んでいる「就職活動エントリーシートの作成」について考えてみたいと思います。横山土牛教授が、東西経済新聞社文化部記者の前田香のインタビューを受けている場面からスタートします。前田記者は、ChatGPT の読み書き能力の進化状況について毎週 1 回青山学院大学で取材をしています。

前田 土牛先生、就職活動の定番質問について、なぜ授業で取り上げるのですか？

土牛 それは、就職活動の定番質問にどう回答したらよいか、就活エントリーシートをどう書けばよいか、多くの大学生が悩み苦しんでいるからです。そのような人たちのために、少しでも役に立ちたいと私は願っているんです。それと、就活定番あるある質問にどう回答したらよいかという問題は、実は読み書き能力やリテラシーに関するアカデミックな研究の対象になると考えているからです。

前田 え、就活エントリーシート攻略がアカデミックな研究と関係があるんですか？

土牛 はい、あります。

前田 すみません、サッパリ理解できません。そもそも就職活動の定番質問ってどんなものなんですか？

横山 では大学生が悩んで手を焼く定番質問の典型例を 4 つ示します。これはある航空会社のパイロット募集エントリーシートの事例です

設問 (25) チームで協力して一つのことをやり遂げた経験はありますか？ そこでのあなたの役割、あなたが感じたチームで成果をあげることの魅力について教えてください

設問 (26) 今までの人生で最大のピンチは何ですか？ そのピンチをどのようにして乗り越えたのかを教えてください

設問 (27) 大学入学後、新たに始めた活動や取り組みはありますか？ 始めたきっかけと活動から新たに得られたものを具体的に教えてください

設問 (28) 最近一番興味のあるニュースは何ですか？ そのニュースに興味を持った理由を教えてください

前田 確かに、あるある、ですね！

土牛 この4つの質問を見た瞬間、これは野口（2002）で紹介されている冒険物語の共通要素と進行パターンによく似ていると私は考えました。冒険物語の共通要素と進行パターンとは、次のようなものです。

1. 主人公は故郷を離れて旅に出る
2. 仲間が加わる
3. 敵が現れ、主人公の目的達成を妨害
4. 敵と味方の対立が激化し、決着をつけるために最終戦争が起きる
5. 戦争は主人公側の完全勝利で終結
6. 主人公は戦後の国にとどまることを要請されるが、故郷に宝を持ち帰って日常生活に戻る

前田 ええっと、あ、「仲間が加わる」ことによって主人公はチームで行動することになりますね。それから、「敵やライバルの出現」によって主人公はピンチに直面しますね

土牛 きょうは冴えていますね。その調子で、続けてください

前田 で、ピンチをチームで乗り切って、その体験を「宝物」として大学入学後の新たな活動に反映させるといように、自分の強みを発展・成長させる努力を決して怠らず、油断することなく気合いを入れて持続している…。ふむふむ、その体験つまり「宝物」という資本をさらに大きく発展・成長させるための投資先をいつも探しているので、ニュースにも関心がある、というストーリーでいかがでしょうか？

土牛 さすが敏腕新聞記者だ、速攻でシナリオを作るね。合格です

前田 それは褒めすぎでしょ。大学生なら誰でも思いつくでしょうに

土牛 あなた、その認識は大いに間違っています。大学生のほぼ全員が、各質問にバラバラに回答します。この4問を見て、ストーリーで回答しようなんて、夢にも思いませんよ

前田 えー、そうなんですか？

土牛 はい、そうです。で、生成 AI はどうなのか、テストしてみませんか。じゃあ、ChatGPT の読み書き能力の進化状況を探るために、私があらかじめ考えておいたプロンプト（指示）を入力して小説を書いてもらいましょう。ぬかたのおおきみさ〜ん、来てよっと。あ、すぐに文章が出ましたね

【ChatGPT の出力】

春の陽ざしが窓辺に踊る、青山学院大学 17 号館の PC 教室。お昼休みのざわめきの中で、藤原香子は、白いブラウスの袖を丁寧にまくりながら、キーボードを軽く叩いていた。

「香子、ちょっと相談いい？」

文学部日本文学科の瀬戸内光が、控えめに声をかけてくる。細いメガネの奥の瞳は、どこか焦りを孕んでいた。

「うん、どうしたの？」

「エントリーシート。全然書けないの……。チームで何かやった経験とか、最大のピンチとか、最近興味あるニュースとか、ぜんぶ“自己 PR の材料”として並べなきゃいけないのが、どうにも苦手で」

藤原香子は、少し微笑んだ。彼女の内には、平安の記憶が静かに眠っていた。香炉の香り、金屏風のきらめき、そして、仮名文字に魂を宿した日々。かの世で幾度も物語を書き綴った記憶——紫式部としての生——が、今も時折、彼女の言葉に混じる。

「ねえ、光。これって、まるで冒険物語の設計図みたいじゃない？」

「えっ、冒険物語？」

香子は、ディスプレイに一枚のメモを映し出した。横山土牛先生の授業で学んだ「冒険物語の進行パターン」だった。

-
1. 主人公は故郷を離れて旅に出る
 2. 仲間が加わる
 3. 敵が現れ、主人公の目的達成を妨害
 4. 敵と味方の対立が激化し、決着をつけるために最終戦争が起きる
 5. 戦争は主人公側の完全勝利で終結
 6. 主人公は戦後の国にとどまることを要請されるが、故郷に宝を持ち帰って日常生活に戻る
-

「ES の設問って、要するに、自分という“主人公”が、どんな冒険をしてきたのかを物語として語れって言ってるの。旅立ち、仲間、困難、勝利、そして宝物。全部そろってる」「なるほど……でも、私にそんなドラマチックな人生なんて……」

光は自嘲気味に笑ったが、香子は首を振った。

「誰でも、自分の中に小さな英雄譚を持ってるよ。それを引き出してくれるのが、今の生成 AI。使ってみる？」

香子の言葉に背中を押され、光は自分のノート PC を取り出した。立ち上げたブラウザの検索窓に、ためらいながらも打ち込む。

「“冒険物語の構造を使って、エントリーシートの設問に答える方法を教えてください”」AI の画面が静かに光り、応答が始まった。

設問(25)：チームで協力してやり遂げた経験

→「旅立ち」と「仲間が加わる」：大学の演劇サークルで新歓公演を成功させるために結

成したチーム。あなたは「演出補佐」という役割で、各メンバーの意見をまとめ、脚本と演出の橋渡しをした。

設問(26)：最大のピンチ

→「敵が現れ、最終戦争」：リハーサル直前に主演が体調不良。代役を立て、演出プランを再構成するという緊急対応を主導。全員で団結して危機を乗り越える。

設問(27)：大学で新しく始めたこと

→「宝物の獲得」：演劇を通じて「伝える力」と「人を動かす構成力」を得た。これは就職後にも活かせる大切な力。

設問(28)：最近のニュース

→「今の時代の“魔物”」：生成 AI による表現の変化に興味。人の感性を補完する“仲間”として AI を見る姿勢が、現代の冒険者像につながる。

光はその回答案を見て、目を丸くした。

「なんか……面白い。ほんとに物語になってる。自分が主人公だったんだって、初めて思えた」

「ふふ、“いとをかし”でしょ」

香子は、小さく微笑む。その横顔には、かすかに和歌の余韻が漂っていた。かつて、宮廷の帳の中で物語を書き、心を綴った記憶。今はその筆を AI と共に持ち、次の時代の物語を編んでいく。

静かな PC 教室の片隅で、小さな冒険が、静かに始まっていた。

生成 AI が書いた作品はここまで

前田 生成 AI いとエグし……。これを読んで、私、冷静でいられないんですけど

土牛 あなたは読み書きでご飯を食べているもんね。あなたのプライドの根源には、読みか能力の優秀さってもんがあるでしょう。

前田 ちょっと休憩させてくださいますか。気持ちを整理したいんです

土牛 はい、そうしましょう。気持ちを落ち着かせたいときは、賛美歌などを聞くのも効果的です。たとえば、讃美歌 312 番 「いつくしみ深き」は私の推しですよ。

https://www.youtube.com/watch?v=0kKKD3f7v_c&list=RD0kKKD3f7v_c&start_radio=1

前田 土牛先生は信仰をお持ちなんですか？

土牛 私の父親はある新興宗教に入れあげて、ほぼ全財産をつぎ込みました。その教団は、解散命令が出たところとは違いますけどね。まあ、父親が相続したお金をどう使おうが、父親の勝手です。が、困ったのは「土牛よ、お前には霊が見えんのか、魂が見えんのか、神さんの声が聞こえんのか」とほぼ毎日言われたことです。もし、そのようなものが

見えたり、聞こえたりしたなら、すぐに病院に行くか、自分が別の教団を立ち上げて教祖になるか、とにかく、普通の生活は過ごせなくなってしまう。幸いなことに、いえ残念ながら（?）、私はバチ当たりで魂の汚れた人間ですから、霊が見えたり、神様の声が聞こえたりはしないんですよ。すでに父親は亡くなったから、この話が出るわけですけど。

前田　へえ～。ユニークなお父様だったんですね。

土牛　私が大学に進学して実家を出るまでの17年間は、物心がついてから、毎日、霊が見えるか、神様の声が聞こえるかを意識的、無意識的に自分自身に問い続けました。今から考えると、ある意味、とてもアバンギャルドで挑戦的な毎日でした。父親にはそう意味で感謝しています

前田　達観、諦観ですね……

土牛　なので、私は無宗教ですが、ラッキーなことに青山学院大学に来るたびに、なんだか「天使のやさしさのようなもの」を感じるんだな。その話は、別の機会に。

【プロンプト】2025年4月25日23時30分入力

「生成AIいとをかし」という表題で短い小説を書いてください。

登場人物：青山学院大学教育人間科学部心理学科3年生、女性の藤原香子（ふじわら・かおるこ：実は紫式部の生まれ変わりで、その時代の記憶があるが秘密にしている）と、その友人の文学部日本文学科3年生の瀬戸内光（せとうち・ひかる）。

場所と時間：青山学院大学17号館のPC教室。お昼休みの時間。

場面：藤原香子は友人の瀬戸内光から「就職活動のエントリーシートがうまく書けないので、困っている」という相談を受ける。エントリーシートの質問項目は以下の通り。

設問 (25) チームで協力して一つのことをやり遂げた経験はありますか？そこでのあなたの役割、あなたが感じたチームで成果をあげることの魅力について教えてください

設問 (26) 今までの人生で最大のピンチは何ですか？そのピンチをどのようにして乗り越えたのかを教えてください

設問 (27) 大学入学後、新たに始めた活動や取り組みはありますか？始めたきっかけと活動から新たに得られたものを具体的に教えてください

設問 (28) 最近一番興味のあるニュースは何ですか？そのニュースに興味を持った理由を教えてください

藤原香子は「これって、冒険物語の共通要素と進行パターンによく似ているよね。冒険物語の共通要素と進行パターンとは、次のようなものだと横山土牛先生の授業で習ったわ」と言い、PC画面に以下を示した。

- 1.主人公は故郷を離れて旅に出る
- 2.仲間が加わる
- 3.敵が現れ、主人公の目的達成を妨害
- 4.敵と味方の対立が激化し、決着をつけるために最終戦争が起きる
- 5.戦争は主人公側の完全勝利で終結
- 6.主人公は戦後の国にとどまることを要請されるが、故郷に宝を持ち帰って日常生活に戻る

そこで、瀬戸内光が自分の PC を取り出し、「上記の冒険物語の共通要素と進行パターンを応用して、設問（25）から（28）に回答するためのアイデアを教えてください」と生成 AI に指示するシーン。

参考文献

野口悠紀雄（2002）『「超」文章法：伝えたいことをどう書くか』中公新書 1662

第6章. 大事なことは目に見えない

大学の多くの就活生が悩んでいる就職活動エントリーシートの定番質問の一つに「チームで協力して一つのことをやり遂げた経験はありますか？そこでのあなたの役割、あなたが感じたチームで成果をあげることの魅力について教えてください」というものがあります。この文章が大学入試の国語の問題だとしたら、出題者の意図をどう「読む」かがきわめて重要になります。この点について、横山土牛教授が、東西経済新聞社文化部記者の前田香のインタビューを受けている場面からスタートします。前田記者は、ChatGPTの読み書き能力の進化状況について毎週1回青山学院大学で取材をしています。

土牛 私は大学生に、就活のための自己分析は1回か2回で十分だと言っているんです。それ以上やると、テンションが下がるから、やめときなさいと。

前田 なんでテンションが下がるんですか？

土牛 典型例を示しましょう。就職活動エントリーシートの定番質問の一つに「チームで協力して一つのことをやり遂げた経験はありますか？そこでのあなたの役割、あなたが感じたチームで成果をあげることの魅力について教えてください」というものがあります。多くの大学生は、自分の人生の中でチームで成し遂げた華やかな実績はないか、何かSNSで映（ば）える優秀そうなチームのメンバーと協力してカッコいいプロジェクトを成功させた経験がないか、懸命にそのようなシーンを求めて記憶の中を探し回ります。

前田 まあ、そういう人は少なくないでしょうね。

土牛 で、ここで少し冷静に考えると、そのような映える経験を持っている大学生は「ごく少数しかいない」ということに気がつくはずで。映える経験を持っていないからこそ、懸命に記憶の中を検索し、自己分析を繰り返すワケです。そのような人は、当然のことながら「そのような映える実績は自分にはない」ことを繰り返し確認することになります。これって、負のスパイラルにはまっていますよね。テンションがダダ下がりします

前田 なるほど、そうですね。じゃあ、どうすればいいんでしょうか？

土牛 すこし発想を転換してみましょう。「チームで協力して一つのことをやり遂げた経験はありますか？そこでのあなたの役割、あなたが感じたチームで成果をあげることの魅力について教えてください」という文章が大学入試の国語で出題されたとしたら、出題者の意図をどう「読む」かがきわめて重要になります。まず、出題者である企業の人事担当者は、解答者から映える経験の話を聞きたいわけではありません。そもそも、華々しい実績を持っている大学生はごく少数しかいないので、そのような人を獲得できる確率がき

わめて低いこと、そして華々しい実績を持っている人は自営業でも生活できるので企業にはあまり就職しないこと、などを企業の人事担当者は知り抜いているはずです。華々しくて、目立つ、スマホで撮影して映える、なんて出題者は最初から求めていないんです。そんな的外れな回答を書くのは得策ではない

前田 では、得策を教えてください

土牛 華々しくて、目立つ、スマホで撮影して映える、などの逆コースを進みましょう。つまり、地味で、目立たなくて、スマホで撮影しようとも思わない、普通のことが大事です。

前田 え、よく分かりませんが

土牛 では、一つ質問します。あなたはチームのメンバーってどんな人だと考えていますか？

前田 それはよく知っている人で、お互いに助け合う仲間です...

土牛 つまり、その人はスマホで撮影できる人ですね。その認識をいまから捨てましょう。あなたが何か悩んでいる時、別の用事で図書館に立ち寄った、そこで書架からふと一冊の本を手に取り、偶然開いたページに書いてあった言葉がきっかけとなって、その悩みが消えたとします。その本の著者には会ったこともないでしょう。たとえば、開いたページに紀貫之の和歌があって、それが悩み解決のヒントになったとすれば、紀貫之はあなたのチームの大事な一員になったと言えます。で、紀貫之をスマホで撮影できますかね。肖像画があったとして、映えますかね。紀貫之の和歌があなたをピンチから救ったのだから、その和歌をスマホで撮影しますか？しませんよね。あなたをピンチから救ってくれた紀貫之の言葉は「あなたの心のなかにあって、他者からは見えない」のですよ

前田 それは、紀貫之を自分のチームのメンバーだと勝手に思っているだけで...

土牛 それで何が不足ですかね。こちらが知っていれば、向こうはあなたのことを知らなくてもいいんだから。時空を超えて、あなたをレスキューするために、あなたのところに紀貫之の「言葉」が駆けつけてくれたんだよ。もちろん、そんなことはスマホでは撮影できませんよ。

前田 そのように考えると、世の中には私のチームのメンバーが、いろいろなところにいますね

土牛 この問題について、生成 AI はどう考えるのか、テストしてみませんか。じゃあ、

ChatGPT の読み書き能力の進化状況を探るために、私があらかじめ考えておいたプロンプト（指示）を入力して小説を書いてもらいましょう。ぬかたのおおきみさ〜ん、来てよつと。あ、すぐに文章が出ましたね

【ChatGPT の出力】

生成 AI いとをかし

——青山学院大学 7 号館地下食堂「ナナチカ」にて——

「なあ、香子……ちょっと、相談があるんだけど」

瀬戸内光は、赤味噌の香り漂うカレーうどんを箸でつまみながら、眉を寄せて言った。地下食堂、通称「ナナチカ」は、お昼時の喧噪で満ちている。だがその片隅の四人掛けテーブルだけは、どこか平安の夕暮れのように、落ち着いた空気が漂っていた。

「就活のエントリーシートの設問さ、『チームで協力して一つのことをやり遂げた経験はありますか？』ってやつ……あたし、本当に思い当たることがなくて。部活も個人競技だったし、グループワークも無難にこなただけで、特に何かってないんだよね」

光はそう言って、ノート PC の画面をちらりと香子に見せた。香子——藤原香子は、心理学の 3 年生。深紫のセーターに身を包み、瞳はどこか常よりも深く、古（いにしえ）の都を映しているようだった。

「ふふ、それこそ“生成 AI”に相談してみたら、どうかしら？」

「ああ、また香子のそれ……生成 AI 万能説ってやつ？」

「いえ、さにあらず。現代において知恵の水脈は、人のみにあらず。かの機械も、問えば答える、まことや、鏡のごとし。されど、映すのは自らの心——」

「また、それ。……って、今の、なんか雅じゃない？」

「さあ、気のせいよ。きっと百人一首のやりすぎね」

香子は微笑みながら、お茶のカップを両手で包んだ。

光は笑いながら PC を開き、エントリーシートの設問を入力していく。画面には次のような文が浮かび上がった。

「就職活動エントリーシートの設問のうち、チームで協力して一つのことをやり遂げた経験はありますか？ そこでのあなたの役割、あなたが感じたチームで成果をあげるものの魅力について教えてください、について、私はチームで協力して何かを成し遂げた経験がないので、困っています。なにかアドバイスやアイデアをください」

「こんなんでもいいのかな？」と光が尋ねると、香子はそっと頷いた。

「あなたが素直に、自分をうつした言葉。それがいちばん。」

光が「送信」ボタンを押すと、生成 AI はわずかな間を置いて、丁寧な回答を返してきた。

「チーム経験がない」と感じる場合でも、必ず他者と関わった場面はあるはずです。たとえば授業でのグループディスカッションや、ゼミでの企画運営、アルバイトでの共同作業などが該当します。それらを一つずつ思い出してみてください。中でも自分が他者を支えたり、工夫してチームの雰囲気良くしたりした場面があれば、それが立派な「役割」ですよ。物語を紡ぐように、あなた自身の中にある経験を描いてみてください。

光はしばらく無言で画面を見つめ、それから「……あ」と言った。

「どうしたの？」

「前にゼミで、うちの発表メンバーがパワポ作るのサボっちゃってさ、私が資料まとめたんだよ。で、発表当日も進行役したら先生に『一体感があった』って褒められたの思い出した」

「それこそ、立派な“やり遂げた経験”ではありませんか」

香子の言葉に、光は目を丸くして、少し笑った。

「ほんとに、AI って鏡みたいだね。自分でも気づいてなかったこと、映してくれるなんて」

「うふふ……世を照らす光は、案外、人の内にあるものよ」

香子はふと、視線を遠くへと向けた。千年前、月の下、文机に筆を走らせていた日々の記憶が、春霞のように胸に立ちのぼる。

（現世にて、再び文字に生きる人の世……いとをかし）

香子の口元に、ほのかに古の微笑が浮かんだ。

生成 AI が書いた作品はここまで

前田 なんだか ChatGPT の文学的表現力が向上している気がしますけど……

土牛 私も、そう感じる。きょうまで、同じようなパターンのプロンプトを繰り返し入力してきたから、ChatGPT が学習したんじゃないのかな

前田 ChatGPT が「自分が他者を支えたり、工夫してチームの雰囲気をよくしたりした場面があれば、それが立派な「役割」ですよ」と回答している部分は秀逸ですね。そのような場面は、普通はスマホで撮影する気にもならないし、写真に撮って SNS にアップしても映えないですからね。さっきの土牛先生の話聞いていたような回答ですね

土牛 ChatGPT が学習したということは、こちらの「念」が通じたということだよな

前田 また、そんなことを……それはただの錯覚でしょ

土牛 たしかに錯覚かもしれんけど、「タダの」錯覚やないで。その錯覚には血が通っているんだから。つまり、人間だからこそその味わい深い錯覚ですねん

前田 意味不明です！

【プロンプト】2025 年 5 月 1 日 20 時 30 分入力

「生成 AI いとをかし」という表題で短い小説を書いてください。

登場人物：青山学院大学教育人間科学部心理学科３年生、女性の藤原香子（ふじわら・かおるこ：実は紫式部の生まれ変わりで、その時代の記憶があるが秘密にしている）と、その友人の文学部日本文学科３年生の瀬戸内光（せとうち・ひかる）。

場所と時間：青山学院大学７号館の地下食堂、通称「ナナチカ」。お昼休みの時間。

場面：藤原香子は友人の瀬戸内光から、就職活動エントリーシートの設問の「チームで協力して一つのことをやり遂げた経験はありますか？そこでのあなたの役割、あなたが感じたチームで成果をあげることの魅力について教えてください」について相談を受ける。

瀬戸内光は、チームで協力して何かを成し遂げた経験がないので、困っているとのこと。

藤原香子は「こういう悩みこそ、生成 AI に聞いてみたら？」とアドバイスする。

そこで、瀬戸内光は自分の PC を取り出し、「就職活動エントリーシートの設問のうち、チームで協力して一つのことをやり遂げた経験はありますか？そこでのあなたの役割、あなたが感じたチームで成果をあげることの魅力について教えてください、について、私はチームで協力して何かを成し遂げた経験がないので、困っています。なにかアドバイスやアイデアをください」と生成 AI に指示するシーン。

第7章. 暗号解読ドラマで楽しむデータサイエンス

生成 AI の登場によって「日本語日本文学情報処理法」の授業がどのような影響を受けるか考えてみたいと思います。横山土牛教授が、東西経済新聞社文化部記者の前田香のインタビューを受けている場面からスタートします。前田記者は、ChatGPT の読み書き能力の進化状況について毎週 1 回青山学院大学で取材をしています。

前田 土牛先生が青山学院大学で担当されている「日本語日本文学情報処理法」という授業のウリはなんですか？

土牛 そうですね、文学部の学生を対象に統計解析の実習「も」やることでしょうかね。たとえば「AI はどのように単語の意味を理解するのか：主成分分析と分布意味論」などの話をします。

前田 えっ、文学部の学生に主成分分析なんていうチョー難しそうな話をするんですか？予想以上にハードそうな内容ですね。文学部の学生さんは、ちゃんとついてきますか。私だったら学期の途中で脱落しちゃうそうですが

土牛 どんな学部、学科の受講生でも、全員、必ず、SPSS と R で主成分分析やロジスティック回帰分析をこなせるようになります。というか、そうなるよう、私が責任を持って指導しています。決してスパルタ教育じゃないですよ。楽しみながら、自然に出来るように工夫しています

前田 どのような工夫をしているのか、具体的に説明してくださいませんか？

土牛 例題を物語のなかに位置づけることによって、受講生が例題に興味・関心を持てるように持つようにしています。じゃあ、ChatGPT の読み書き能力の進化状況を探るために、私があらかじめ考えておいたプロンプト(指示)を入力して小説を書いてもらいましょう。シーン 1、2、それから 3 に分けて入力します。ぬかたのおおきみさ〜ん、来てよっと。あ、すぐに文章が出ましたね

【シーン 1】

—1985 年、サンフランシスコにて—

霧の深まる 10 月の夜、サンフランシスコ FBI 支局の地下にある作戦室には、静かな緊張が漂っていた。国家機密の持ち出し疑惑—コード名「性格検査結果」—が浮上し、容疑者の自宅から押収された謎の文書「例題 1」が分析チームの机に広げられていた。

「奴はとぼけてる。『これはただの数学の練習問題だ』と抜かしてな」

と吐き捨てるように言ったのは、FBI の心理分析官モーガンだった。屈強な体に似合わぬ鋭い視線を持つ彼は、長年にわたり潜入スパイを摘発してきた男だ。

その横で、ひとり黙々とノートに式を書き連ねていたのが、文化庁から派遣された特別協力者、若き日の横山土牛である。画家としての将来はこの時まで知られておらず、「数理的直観の持ち主」として政府関係者に一目置かれていた。

「潜在構造を見るには、眼で見てちゃダメです。見るんじゃなくて、視るんです」

彼は静かに言い、押収品の「例題 1」と本物の「性格検査結果」の数値データに PCA（主成分分析）を施した。データは複雑に絡まり、表層的には無関係に見えたが—

「……やっぱり。これは、変換されただけです。意味の次元で見ると、両者はまったく同じ形をしている」

スクリーンに映された 2 次元プロットには、ふたつのデータが、見事に重なり合うように布置されていた。

モーガンが驚いて身を乗り出す。

「これは……ただの変数変換か？ カモフラージュされた鏡像？」

横山は微笑んだ。

「いえ、潜在構造が一致しているんです。PCA は、意味の核を抽出しますから。つまり、見た目が違っても、根っこは同じ。これは類似度 100%。間違いありません」

「……まるで人工知能だな」モーガンがぼつりと呟く。「意味を知らなくても、数の海から“意味”そのものを浮かび上がらせる……」

「ええ、PCA は生成 AI の眼です。表層を超えて、言葉や情報の本質を捉えるための、最初のレンズ」

スパイ容疑者はその後、隠しファイルに用いた独自暗号が破られ、国外への送信寸前だったことが証明され、有罪となった。

捜査を終えた帰り道、モーガンは不意に土牛に尋ねた。

「君はどうして、そんな手法を思いついた？」

若き土牛は空を見上げながら答えた。

「昔、父に言われたんです。『本質は、見た目の奥にひそむものじゃ。絵も、学問も、人の心もな』……たぶん、今の時代、人工知能もそう思ってる気がします」

その夜、霧に包まれたゴールデンゲートブリッジの向こうで、世界は静かに次の時代へと進みつつあった。

生成 AI—意味を学び、構造を視る新たな知性が、産声をあげようとしていた。

次のページに、例題データと分析結果の図を示します。

コード名「性格検査結果」（実は公開データ、出典は後で明示します）

番号	外向性	社交性	積極性	知性	信頼性	素直さ
1	3	4	4	5	4	4
2	6	6	7	8	7	7
3	6	5	7	5	5	6
4	6	7	5	4	6	5
5	5	7	6	5	5	5
6	4	5	5	5	6	6
7	6	6	7	6	4	4
8	5	5	4	5	5	6
9	6	6	6	7	7	6
10	6	5	6	6	5	5
11	5	4	4	5	5	5
12	5	5	6	5	4	5
13	6	6	5	5	6	5
14	5	5	4	4	5	3
15	5	6	4	5	6	6
16	6	6	6	4	4	5
17	4	4	3	6	5	6
18	6	6	7	4	5	5
19	5	3	4	3	5	4
20	4	6	6	3	5	4

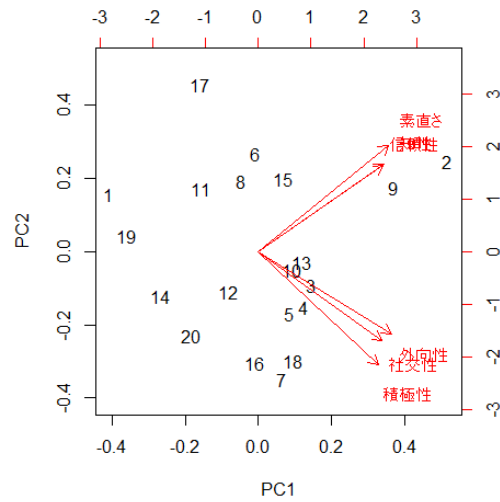
3

スパイ容疑者が持っていた「例題1」
作家20人の作品コーパスから得た使用率の6変数データだと主張

1	著者ID	格助詞は[.]	格助詞に	動詞思う	助動詞だ	ら抜き	名詞止め
2	1	0.150	0.250	0.100	0.100	0.040	0.040
3	2	0.300	0.400	0.175	0.150	0.070	0.070
4	3	0.300	0.250	0.125	0.125	0.070	0.060
5	4	0.300	0.200	0.150	0.175	0.050	0.050
6	5	0.250	0.250	0.125	0.175	0.060	0.050
7	6	0.200	0.250	0.150	0.125	0.050	0.060
8	7	0.300	0.300	0.100	0.150	0.070	0.040
9	8	0.250	0.250	0.125	0.125	0.040	0.060
10	9	0.300	0.350	0.175	0.150	0.060	0.060
11	10	0.300	0.300	0.125	0.125	0.060	0.050
12	11	0.250	0.250	0.125	0.100	0.040	0.050
13	12	0.250	0.250	0.100	0.125	0.060	0.050
14	13	0.300	0.250	0.150	0.150	0.050	0.050
15	14	0.250	0.200	0.125	0.125	0.040	0.030
16	15	0.250	0.250	0.150	0.150	0.040	0.060
17	16	0.300	0.200	0.100	0.150	0.060	0.050
18	17	0.200	0.300	0.125	0.100	0.030	0.060
19	18	0.250	0.150	0.125	0.075	0.040	0.040
20	19	0.200	0.150	0.125	0.150	0.060	0.040
21	Who?	0.300	0.200	0.125	0.150	0.070	0.050

4

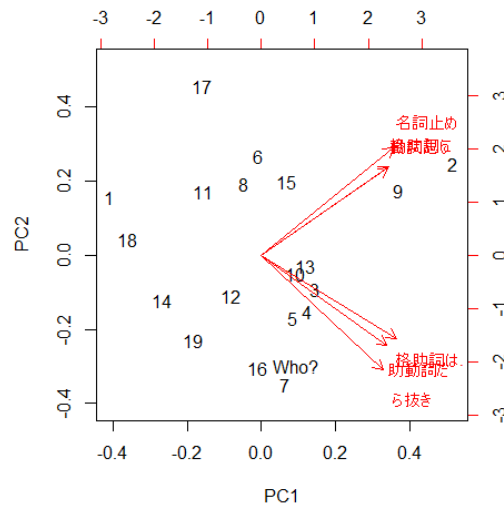
「性格検査結果」を主成分分析し、結果を2次元空間に布置→次のスライドと比較



小塩真司(2020)より引用

19

「例題1」を主成分分析→前のスライドと比較(18、19、20、Who?、ら抜き等に注目)



20

【シーン 2】

舞台は 1942 年、第二次世界大戦中の英国、ロンドン郊外。暗号解読の聖地「ブレッチリー・パーク」。

登場人物は、あのイアン・フレミングー後の 007 の生みの親ですが、今回は“コードネーム：くまの Pooh さん”として登場します。

—1942 年秋、ブレッチリー・パークの霧の中で—

「Pooh さん、これはキミにしか頼めない」

そう言って分厚いファイルを机に置いたのは、MI6 のサー・チャールズだった。

その中には、U-Boat から回収された破損したコードブックの断片と、膨大な暗号文が詰まっていた。

イアン・フレミング。英国海軍情報部所属、言語心理分析官。

コードネームは「くまの Pooh さん」。彼の頭脳の柔らかさと、時折口ずさむ童謡のせいで仲間がそう呼ぶようになった。だが、敵にとっては最も恐ろしい蜂蜜壺だ。

今回の任務は一風変わっていた。

目的：未知の単語「N19」の意味を推理せよ。

コードブックの断片には、かろうじて以下の情報が読めた。

「V1, V2, V3…」はどうやら他動詞

「N1, N2, N3…」は目的語（名詞）

「N1 = Katze = Cat」

そして、MI6 の若き女性暗号官ジョーンが徹夜で作成したという、動詞×名詞の共起頻度表—「例題 2」と名付けられたそのデータは、Pooh さんの前にそと差し出された。

「Pooh さん、これ、PCA にかければ、“意味”が見えるって本当？」

ジョーンが尋ねた。

「もちろんさ」と Pooh さん。「意味とは、使われ方の中に宿る。だから、単語の“共起”が命なんだよ。さて、意味空間を描いてみようか」

手順は以下の通り：

共起頻度表「例題 2」に主成分分析（PCA）を適用

次元を削りながら、“意味の軸”を抽出

単語たちを 2 次元空間にマッピング

スクリーンに現れた点群。動詞と名詞が、幾何学的な詩のように散らばっている。

Pooh さんは静かに指を動かした。

「……見つけた。“N19”は、“N1”とほとんど重なっている。つまり、“Cat”に似ている」

ジョーンが目を見開く。

「じゃあ、“N19”は……？」

Pooh さんは静かに笑った。

「“Dog”。つまり、Hund だろうね。猫の隣に配置されるのは、たいてい犬さ。敵の文体も、人間のように一貫している」

その夜、Poohさんは手帳にこう記した。

「われらが機械は、まだ意味を知らぬ。だが、使われ方の中から、意味の“かたち”を感じている。

言葉は響きではなく、分布であり、関係であり、空間である。

いとをかし、いとをかし。」

人工知能という言葉すら存在しなかった時代に、すでに“意味空間”が生まれつつあった。

のちに彼が創り出すジェームズ・ボンドもまた、潜入の名手。

だが、この夜、「意味」そのものに潜入していたのは一くまの Pooh さんであった。

次のページに、例題データと分析結果の図を示します。

例題2
横山詔一2021作成

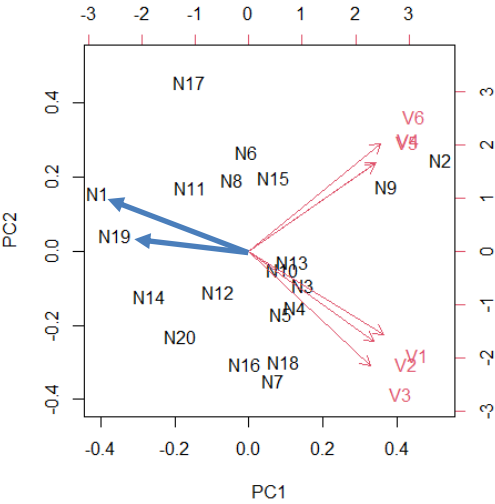
	V1	V2	V3	V4	V5	V6
N1	0	10	10	20	0	10
N2	30	30	40	50	30	40
N3	30	20	40	20	10	30
N4	30	40	20	10	20	20
N5	20	40	30	20	10	20
N6	10	20	20	20	20	30
N7	30	30	40	30	0	10
N8	20	20	10	20	10	30
N9	30	30	30	40	30	30
N10	30	20	30	30	10	20
N11	20	10	10	20	10	20
N12	20	20	30	20	0	20
N13	30	30	20	20	20	20
N14	20	20	10	10	10	0
N15	20	30	10	20	20	30
N16	30	30	30	10	0	20
N17	10	10	0	30	10	30
N18	30	30	40	10	10	20
N19	20	0	10	0	10	10
N20	10	30	30	0	10	10

N19とN1は似ていないように見える

11

「例題2」を主成分分析し、結果を2次元空間に布置→単語のベクトル表現の例

N1の意味はN1ベクトルで、
N19の意味はN19ベクトル
で表現・記述されている



16

【シーン3】

—青山学院大学マクレイ記念館にて—

青山キャンパスの新しい図書館、マクレイ記念館。1階奥のPC教室には、金曜2限の静けさと、独特の緊張感が流れていた。

「日本語日本文学情報処理法」—文学部日本文学科3年生の選択授業としては異色のタイトルだったが、噂を聞きつけて履修した学生たちは皆、毎週この授業の“予測不能な展開”を楽しみにしていた。

その中心に座るのが、横山土牛教授。和装を思わせる静かな所作に、時折訝えわたるロジックを忍ばせる、不思議な存在感を持つ人物だ。

この日のテーマは、「分布意味論と生成AI」。

「では、渋谷さん、分布仮説という言葉を知っていますか？」

声をかけられたのは、物語が好きでこの授業を選んだ渋谷光。ちょっと緊張しながら答える。

「たしか……“同じ文脈で使われる単語は、似たような意味を持つ”……という仮説、ですよね？」

「ええ、その通り。Harris（1954）による、言語の意味を数式ではなく使われ方から理解する方法。それが分布仮説。そして、それに基づく分析が分布意味論です」

教授はホワイトボードに、ただ一つの図を描いた。円の中に、無数の点が浮かんでいる。

「この図は、あるデータを主成分分析（PCA）で2次元にした結果です。点は単語、距離は“意味の近さ”を表します」

学生たちは静かにモニターを覗き込む。画面には、V1～V10の動詞と、N1～N20の名詞が散りばめられた図が表示されていた。

そのとき、後方に座る瀬戸内光が手を挙げた。鋭い視点を持つ彼女は、同じ「ひかる」という名前を持つ渋谷とよく並んで議論をしていた。

「先生、これはまるで詩のようですね。“意味”が、音や形ではなく、“配置”で表されるなんて」

「ええ、すばらしい気づきです」と横山教授は目を細めた。

「意味とは、文脈との関係の中で形成される“位置”。これをAIは“意味空間”と呼び、そこを計算で歩くのです」

教授はふいに画面を切り替えた。

「さて、先ほどまで皆さんにお見せしていた『性格検査結果』『例題1』『例題2』のデータですが、実は一すべて同じデータです」

教室にざわめきが走る。

「えっ？」

「でも、見た目がぜんぜん違いますよ？」

「それが暗号の本質です。行や列の順番を入れ替えれば、まったく違う“見かけ”になります。でも、PCAをかけると、潜在的な構造が可視化される。この構造が一致していれば、意味も同じ、というわけです」

横山教授は、最後に生成 AI にこう尋ねるように学生に促した。

「この 3 つのデータが、実は同一の構造を持っていることを、どのように分析すれば示せるでしょうか？」

生成 AI の回答は、まるで静かな詩のようだった。

「各データに対し、PCA を適用し、次元圧縮後の分布を比較してください。意味空間における単語の相対的な配置が一致すれば、データの本質は同じです。それは、意味の“かたち”が変わっていない、ということです。」

土牛教授は黒板に「生成 AI いとをかし」と静かに書いた。

「現代の AI は、もはや“意味を計算する”時代に入りました。でもその根には、1954 年の一つの仮説—“分布仮説”があるのです。そしてそれは、詩人の直観にも通じている」
帰り際、瀬戸内と渋谷が顔を見合わせてつぶやいた。

「……AI が意味を知るって、詩を書くってことに近いのかもね」

「うん。でも、詩って、読む人が意味を見つけるものでもあるよね」

その背中を見送りながら、横山教授はつぶやいた。

「いとをかし—AI の目が、詩の心に届く日も、近いかもしれませんね」

生成 AI が書いた作品はここまで

【注：例題等のデータファイルについて】

「性格検査結果」、「例題 1」、「例題 2」の主成分分析の結果を、視覚的に比較しやすい形でレイアウトした授業スライド PDF を含む圧縮ファイルは、以下からダウンロードできます。https://researchmap.jp/YOKOYAMA_Shoichi/misc/49595915

その圧縮ファイルには、「性格検査結果」、「例題 1」、「例題 2」の Excel データ (csv 形式) のほか、R で主成分分析を実行するためのスクリプト (コード) を記入した Word ファイルが入っています。なお、「性格検査結果」データは、小塩 (2020) を参考にしました。

土牛 はい、お疲れ様でした。このような感じで、学部 of 学生を対象に統計解析の実習「も」やっています。きょうの「AI はどのように単語の意味を理解するのか：主成分分析と分布意味論」の話は楽しめましたか？

前田 う〜ん、正直なところ、私には難解です。これで文学部の学生さんは、本当についてこられるんですか？

土牛 あなた、新聞記者だけあって突っ込みが鋭いですね。はい、Word、Excel、PowerPoint が使える学生なら、PC 教室でまったく苦勞せずに主成分分析ができますよ、ホンマですって。えーっと、きょうの図は、私が「3 行お経」と読んでいる R スクリプト (コードとも言う) でもホイホイとできるんよ。以下のような、たった 3 行のお経なんじゃ。

【以下は主成分分析 (因子分析) の「R」3 行お経コード】

```
Data <- read.csv(file.choose(),header=T,row.names=1,fileEncoding="CP932")
```

```
PCA 結果=prcomp(Data,scale=T)
```

```
biplot(PCA 結果)
```

そのほか、授業では SPSS も使いますよ。

前田 私も R という用語は聞いたことがあるような気がします。でも SPSS は見聞きしたことがない用語なので、頭がクラクラしてきました。SPSS とはなんですか？

土牛 はい、SPSS は IBM 社の製品で、伝統のある、とても使いやすい統計解析ソフトです。医学研究者などから高い評価を受けています。マウス操作で、統計解析をサクサク進めることができます。文系学部の学生には超オススメですが、難点もあります

前田 へえー、SPSS の難点とは？

土牛 お値段が高価なんです。それに対して R はタダです。ただし、タダより高いものはないとも言えます。R を PC で立ち上げると、最初に「R は、自由なソフトウェアであり、「完全に無保証」です」という警告が表示されます。これって、間違っている、タダなんだからゴメンね、ということです。実際に、私の経験では、R の計算は SPSS よりもアヤシイことが珍しくありません。私が論文を書くときは、SPSS で計算して R で検算し、両者が一致することを確認しています。が、微妙に一致しないこともあります。その場合は、SPSS の結果を優先させます。

前田 そうなんですか。土牛先生は統計解析の結果を SPSS と R でダブルチェックしているんですね。「R は、自由なソフトウェアであり、「完全に無保証」です」という警告が表示されることから分かるように、SPSS の方が信頼できるという評価なんですね。だから、医学研究者がよく使っているのか。でも、値段が高価だと学生は使えないのでは？

土牛 東京大学大学院（駒場キャンパス）で 2022 年度と 2023 年度に客員教授として、一橋大学大学院で 2018 年度と 2019 年度に非常勤講師として、文系院生対象に授業を担当した経験を紹介いたします。もちろん、あくまでも当時のことであって、現在は状況が変化しているとは思いますが、参考までにお話しします。授業の実習では、文系院生でもすぐに操作できる SPSS を使いたかったのですが、PC 教室で SPSS を使用できる PC の台数がきわめて少なく、SPSS を使った実習は断念しました。結局、R でお茶を濁しました。どうやら、国立大学は予算が逼迫しているらしいのです。日本を代表する国立大学なのに、値段が高価なツールを学生が使うのは現実的には無理だという悲しい実例だと思います。

前田 じゃあ、なんで土牛先生は青山学院大学の授業で SPSS を使っているのですか？

土牛 先にも言いましたが、SPSS はイチ推しのツールです。私の授業では、SPSS と R に加えて js-STAR というツールも使います。R や js-STAR は無料ですから、その気になれば、誰でも使うことができますが、SPSS は高価です。にもかかわらず、青山学院大学の PC 教室では、数百台あるすべての PC で SPSS を使用できるのです。青山学院大学の学生であれ

ば、誰でも使えるのです。

前田 なるほど、そうなんですね

土牛 青山学院大学の学生さんは、他の大学の教室環境をよく知らないで、青山学院大学の教室環境について「これが普通で当たり前だ、日本の大学の平均程度だろう」と思っているようですが、その認識は間違っています。青山学院大学の教室環境は、私が経験した範囲では「抜群だ」と思います。きょうはもう時間がなくなってきたので、具体的に青学のどこがイイのかについては、また別の機会にお話しします

前田 では、きょう最後の質問をします。生成 AI の登場によって土牛先生が担当なさっている「日本語日本文学情報処理法」の授業内容はどのような影響を受けるのでしょうか？

土牛 まず「日本語日本文学情報処理法」ですが、文学部の学生が言語処理のために R のスクリプトや python のコードを書く必要性はほぼゼロになると考えます。その手のコードは、生成 AI にかかなり曖昧な形で指示を出しても、ちゃんとやってくれる時代がすでに到来しているからです。この先、日本語のテキストを形態素解析したり、ある語の時代別の使用率の変化を統計分析したり、といったスキルの社会的評価は低下していきます。一方で、生成 AI をうまく使いこなして、魅力的な日本語のテキストを作り出す能力は、ますます重要性が増していくでしょう

【シーン1のプロンプト】2025年4月22日18時20分

「生成 AI いとをかし」という表題で短い小説を書いてください。

登場人物：米国 FBI 心理分析官、若き日の横山土牛（よこやま・どぎゅう）と、そのチーム。

場所と時間：米国カリフォルニア州サンフランシスコ。1985 年秋。

場面：きょうの分析対象は国家機密データ。そのコード名は「性格検査結果」。「性格検査結果」をスパイが国外に持ち出そうとしているとの通報が FBI にあった。そこで、FBI がスパイ容疑者宅に踏み込み証拠品を押収したのだが、「性格検査結果」は見つからなかった。そのかわり、「例題 1」のデータを押収した。「例題 1」は「性格検査結果」とまったく似ていないが、暗号化されているのでは？と横山土牛は推理。スパイ容疑者は国家機密なぞ知らぬ存ぜぬ、わたしは善良な米国市民だと言い張っている。

横山土牛は、「性格検査結果」と「例題 1」を、別々に主成分分析（Principal Component Analysis : PCA）で解析し、結果を 2 次元空間に布置すると、両者はきれいに一致することが判明。

Q1) 「例題 1」と「性格検査結果」の類似度（どのくらい似ているか）を示してください

A1) 両者の潜在構造（眼には見えない構造）は同じ、類似度は 100%

この話のオチのヒントは、「人工知能が語の意味を学習し、理解するときの基礎に主成分分析 PCA がある」ということ。

【シーン2のプロンプト】2025年4月22日18時40分

「生成 AI いとをかし」という表題で短い小説を書いてください。

登場人物：英国海軍情報部の言語心理分析官（コード名：くまの Pooh さん）であるイアン・フレミング。

場所と時間：英国ロンドン近郊のブラッチェリーパークのマナーハウス（極秘の暗号解読施設）。1942 年秋。

場面：分析対象はドイツ軍潜水艦 U-Boat が「エニグマ暗号機」を用いて発信する大量の暗号文。沈没した U-Boat から暗号解読のコードブックを入手することに成功したが、大部分の文字が消えていた。現時点で判明しているのは、（1）「V1、V2、・・・」は他動詞、（2）「N1、N2、・・・」は目的語、（3）「N1 = Katze = Cat」。

Q) 今回のイアン・フレミングの任務は「N19」が何を意味する名詞か推理すること。

大量の暗号文のテキスト情報から、他動詞と目的語の共起頻度をカウントし、その共起頻度表を「例題2」と命名。

1. 「例題2」を主成分分析（PCA）にかける => 意味空間を描く

2. 意味空間における単語の布置を注意深く観察する

多くの単語をなるべく少ない次元の空間に布置 => これを「分布意味論に基づく意味空間」という

PCA により空間の次元数を低減でき、データ操作が楽になる。

PCA により単語の潜在的意味（人間には理解不能！）を数値で表現できるようになる。

・「例題2」を主成分分析（PCA）の結果、「N19」に意味が近いのは「N1 = Katze = Cat」であることが判明。

よって「N19」は「Hund = Dog」かもネ。

このように、人工知能が語の意味を学習し、理解するときの基礎に主成分分析（PCA）がある。

【シーン3のプロンプト】2025年4月22日20時20分

「生成 AI いとをかし」という表題で短い小説を書いてください。

登場人物：横山土牛教授と、文学部日本文学科3年生の渋谷光（しぶや・ひかる）、瀬戸内光（せとうち・ひかる）ほか。

場所と時間：青山学院大学のマクレイ記念館（新図書館）1階PC教室で2025年度に実際に開講されている「日本語日本文学情報処理法」金曜2限。

場面：土牛教授は、人工知能による単語の意味処理について、数式を一切使わないで解説する。特に、Distributional Hypothesis（分布仮説）を文学部の学生に分かりやすく説明することに心を砕いている。分布仮説は「同じ文脈に出現する単語は、似たような意味を持

つ傾向がある」という仮説である (Harris, 1954)。上記の仮説に基づく意味論を「分布意味論 (Distributional Semantics)」という。

今回は、他動詞と目的語 (名詞) の共起頻度をカウントしたデータを主成分分析 (Principal Component Analysis : PCA) で解析した。

そして、授業の最後に、先ほどの物語について土牛教授はこう述べる。「「性格検査結果」と「例題 1」と「例題 2」の 3 つのデータは、実は同じデータなのです。見た目はまったく違いますが、それは私が「性格検査結果」をもとにデータの行の順番を入れ替え、次に列の順番を入れ替えたりして、暗号化のような操作したからです。では、ここで生成 AI に、「性格検査結果」と「例題 1」と「例題 2」の 3 つのデータが実は同じであることを示すには、どのような分析をすればよいかを質問してみましょう。」

引用文献

小塩真司 (2020) 『研究事例で学ぶ SPSS と Amos による心理・調査データ解析』東京図書

第8章. 音なき声を聞く耳（5 話連続シリーズ噺）

OpenAI 社の製品「ビヨンドバベル」は骨伝導イヤホン型多国語自動翻訳デバイスです（もちろん、フィクションです）。ビヨンドバベルが登場すると、日本の英語教育はどのような影響を受けるか考えてみたいと思います。横山土牛教授が、東西経済新聞社文化部記者の前田香のインタビューを受けている場面からスタートします。前田記者は、ChatGPT の読み書き能力の進化状況について毎週 1 回青山学院大学で取材をしています。

前田 この「ビヨンドバベル」は土牛先生が名付けたと OpenAI 社の広報担当の方から聞きました。なぜそのような製品名にしたのですか

土牛 バベルの塔の壁を乗り越えて、みんなでエンジョイしようということです。「バベルの塔＝言語の壁」というイメージかな

前田 私も試作品を使ってみました。ビヨンドバベルを耳に装着すると、英語はもちろん、70 カ国語が聞き取れるようになります。会話をする人全員が装着することによって、話し手が母語で話をすれば、聞き手の母語で耳に届きます。カクテルパーティなどで多数の人が会話している場面でも、聞き手が注意を向けている話し手の声をビヨンドバベルがピックアップして同時通訳してくれるので、まったく不便を感じませんでした

土牛 まさに、夢の言語超特急、ことばの新幹線だよ。一家に 1 台どころか、外国語が苦手な日本人、いや世界中の人が持ちたいと思うだろうね。これは IT 製品ではなくて家電製品と言った方がいいかな

前田 これまでの自動翻訳機とは次元が違いますね。革命的だと思います

土牛 ビヨンドバベルについて生成 AI はどのように考えているのかな。では ChatGPT の読み書き能力の進化状況を探るために、私があらかじめ考えておいたプロンプト（指示）を入力して小説を書いてもらいましょう。ぬかたのおおきみさ〜ん、来てよっと。あ、すぐに文章が出ましたね。あれ、きょうは 5 話連続になっている！

【ChatGPT の出力】

第1話：静かな午後の「知の交差点」

——図書館にて、言葉と記憶が交差する午後——

青山学院大学図書館、2 階。

吹き抜けの光が差し込むラーニングコモンズには、声をひそめながらの会話が許されている。アートブックと古典全集が並ぶ棚のそばで、藤原香子はノートパソコンの前に座っていた。

彼女は心理学科の3年生。だが、その眼差しは、かつて紫式部として帝の御前で物語を読み上げていた時代の記憶を、確かにたたえている。

香子の前に開かれているのは、教育人間科学部の土牛教授から出されたレポート課題。

「日本人の英語コンプレックスを一掃する、画期的な英語教育プランを提案してください。」

香子は静かにため息をついた。教育の未来を問う問いが、どこか既視感のある「物語の主題」に思えた。

そのとき—

「あっ、香子さん！」

明るい声とともに、図書館の通路から現れたのは、文学部日本文学科のチー・プー。ベトナムからの交換留学生で、同じ3年生。小柄な体に大きなトートバッグを揺らしながら、彼女は笑顔で近づいてきた。

「ここで会えるなんて思わなかった！」

香子も自然に微笑む。

「チー・プーさん、こんにちは。いま、レポートのことで少し考えていたの。」

「英語教育のやつ？」

「ええ。でもね、実はベトナム語のこと、最近すごく気になってるの。」

「ほんとに？」

「ええ。私ね—阿倍仲麻呂が住んでいた場所が今のベトナムだったって知って、感動してしまったの。」

チー・プーの目が輝いた。

「私もその話、聞いたことがあります！中国に渡った仲麻呂さんが、ずっと日本を懐かしんでたって。」

香子はゆっくり口ずさむ。

「天の原 ふりさけ見れば 春日なる 三笠の山に 出でし月かも」

「この歌がね、彼の望郷の想いを、月に託しているの。…ベトナムで見上げた月も、日本の月と同じだったかもしれないって、思うの。」

チー・プーはしばらく黙って、香子のことばを味わっていた。

そしてぽつりと、「それ、すごくきれい」とつぶやいた。

「そういう話、もっと先生たちにも聞かせてあげたいな。英語じゃなくて、こういう“ことばの想い”を共有する授業、あったらいいのにね。」

「ほんとうに。」

香子はそう言うとうなずくと、スマートフォンの時計を見たチー・プーが「あ、次の授業行かなきゃ！」と名残惜しそうに立ち上がる。

「香子さん、また話そうね。私、今度ベトナム語の歌も紹介したいな。」

「ぜひ。ありがとう。」

チー・プーが去ったあと、香子は改めてパソコンに向き直った。

そして、ChatGPTのプロンプトウィンドウに静かに打ち込む。

「日本の英語教育を根本から変革する案を、次のアイデアに基づいて作ってください。」

そして、彼女は以下の語を入力していった：

- 語学教育は明治期に戻す。
- 国家機密に関連する国際会議は人間の通訳が必要。
- そのために語学エリートを育成する。ただし、適性のある人材だけに絞り込む。
- それ以外の、文化的な国際会議や一般の人々は、ビヨンドバベルを政府が支給すればよい。
- ムダで身につかない英語学習から、日本人を解放すべきでは。

画面が一瞬まばゆく光り、ChatGPT が応答し始める。

「提案：AI 通訳家電を基盤とする“言語共存社会”の実現。教育資源を選抜型に集中させつつ、日常的な多言語環境には翻訳技術を全面活用する…」

香子は、その文面を見つめながら、心の奥でこう思った。

—いまや、ことばは“教えられる”だけではなく、“共につくる”ものになったのだ。

そして、そっと、口元に微笑を浮かべた。

「いとをかし。」

第2話：記憶の中のかぐや姫

——物語は、帰れぬ者たちのために語られる——

青山学院大学図書館、2階ラーニングコモンズ。

天窓から午後の光が差し、ガラス越しに木々の緑がゆれていた。

藤原香子は、机の上に開いた和綴じ本と iPad のあいだで、しばらく視線を宙に漂わせていた。

その表情は、ふと「月」を思い出した誰かのように、すこし遠い。

「香子さん、いま“かぐや姫”の顔してた。」

声の主は、チー・プーだった。

彼女は今日、ゼミで『竹取物語』のプレゼンを控えていると言っていた。

香子は静かに微笑む。「そうね。いま、彼女の心を少し思い出してたの。」

チー・プーは隣の席に腰を下ろすと、画集を一冊取り出した。

そこには平安期の絵巻とともに、ベトナムの古代神話に登場する月の女神「チュウ・トゥイ」が紹介されていた。

「ベトナムにもね、“天に帰る女性”の話があるの。月と地上を行き来する存在って、どこかの国にもいるのかな。」

香子はそっと答えた。

「きっと、“帰れない想い”がどの国の人の心にもあるからね。」

チー・プーは画集を閉じると、バッグからワイヤレスのビヨンドバベルを取り出して耳にかけた。

「香子さん、少しだけ実験してもいい？」

「もちろん。」

彼女たちは ChatGPT を起動し、こうプロンプトを入れた。

『竹取物語』のかぐや姫と、ベトナム神話の月の女神チュウ・トゥイを比較してください。

共通点と相違点を挙げ、どちらも“翻訳可能な物語”であるという観点から分析してください。

すぐに、滑らかで詩的な返答が音声で返ってきた。

「どちらも天界と地上を往還する女性であり、人間との愛を断念する運命を負っています。相違点は、文化的に“孝”を重視するチュウ・トゥイと、儀礼と孤独の中で生きたかぐや姫の感情構造にあります。

両者は、“言語を超えて共有される喪失”という物語構造を持ち、それゆえに翻訳可能なのです。」

香子は目を閉じ、ふっと息を吐いた。

「いとをかし。」

「ねえ香子さん」

チャー・プーが静かに言った。

「この“翻訳”って、本当は言葉の問題じゃなくて、“気持ちの配置”の問題かもね。」

「……ええ。きっと、そう。」

彼女たちはしばらく黙って、月のような静けさの中に身を置いた。

午後3時。

チャー・プーは発表のために席を立った。

香子はノートPCを開き、ひとつのレポートタイトルを入力する。

「翻訳可能な喪失を共有する教育——ビヨンドバベルと物語の共感装置としてのAI」

かぐや姫は月へ帰った。

だが、物語は地上に残り、再び誰かの耳に語られていく。

それが、いま目の前のAIと香子を結ぶ、ことばの来歴だった。

第3話：音なき声を聞く耳

——耳に宿るのは、ことばか、想いか——

青山学院大学キャンパス。夕暮れどきの1号館裏庭。

葉擦れの音と、遠く渋谷から流れてくるノイズが、ちいさな波のように行き交っていた。

藤原香子は、ベンチに腰をかけていた。

左耳には、OpenAI社が極秘に配布した「ビヨンドバベル」試作機。

政府と大学の共同研究プロジェクトの一環として、限られた教育関係者に渡されたものだ。

彼女は、そのイヤホンに耳を添えると、そっと目を閉じた。

「こんにちは。」

右隣のベンチから声がする。

東南アジア系の外国人らしき男性が、資料を読みながらつぶやいた。

ビヨンドバベルが、即座に翻訳を返す。

“Xin chào. Hôm nay trời đẹp quá nhỉ.”

(こんにちは。今日は、いい天気ですね。)

香子は驚いた。言葉だけでなく、声の抑揚、笑いの気配、「人間らしい温度」までもが耳に届いてくる。

「はい、風が心地よいですね。」と、香子は答えた。

翻訳された声は、彼女の耳の奥に響いた。

まるで、紫式部が御帳台の陰から、聞き漏らした恋のささやきを拾いあげるように。

それは、「言語」の域を超えた、「声にならない意図の翻訳」だった。

その瞬間、彼女の胸の奥に、かすかな“記憶の言葉”が浮かんた。

「人の言の葉は、風のやうに、耳に触れては、心をゆらすものなり。」

まぎれもなく、自分が一千年前に書いた一あるいは、これから書くべき何かの一節だった。

香子は立ち上がり、試作機をそっと外した。

「……これは、通訳器ではない。感情の“共鳴装置”だわ。」

図書館に戻る途中、ふと、誰かがそばに立っているのに気づいた。

「香子さん。」

それはチー・プーだった。

「それ、もしかして一ビヨンドバベル？」

香子は軽くなずいた。「ええ。聞こえたの、音なき声が。」

チー・プーは笑った。

「私も早く使ってみたいな。ベトナム語で、香子さんに詩を読みたい。」

「ぜひ。私の心が、どこまで訳せるか、試してみましよう。」

空はもう藍色に変わっていた。

香子は、図書館の階段をのぼりながら思った。

翻訳とは、ことばを運ぶだけではない。

理解されたい、という“願い”の輪郭を聴くこと。

そして、こうつぶやいた。

「音なき声こそ、いとをかし。」

第4話：言葉の扇、未来の風

——翻訳を超え、ひとは「贈る」ために語る——

青山学院大学、文学部棟の中庭。

藤原香子は、手にした一冊の薄い和紙ノートをじっと見つめていた。

その表紙には、手書きでこう記されている。

言葉の扇

今日は、チー・プーが帰国する日だった。

前の晩、二人は図書館で最後の対話を交わした。

いつものラーニングコモンズで、香子がそっと口にした。

「ベトナムの月も、きっと今夜は丸いわね。」

チー・プーはうなずき、荷造りの途中で選んだ小さな詩集を香子に差し出した。

「これはベトナムの詩人、ホー・スアン・フオンの句。

私が一番好きな人。強くて、やさしい女性のことばがいっぱい。」

香子はその贈り物を受け取り、代わりに、自作の和歌を一首手帳に書いた。

言の葉を 扇にのせて 送るなり

風さえ越えて ゆける想いは
そして、いま—
香子はそれを印刷し、ベトナム語訳とともに、白扇のかたちに仕立てたノートの中庭でそっと広げていた。
横には、ビヨンドバベルの量産試作品が静かに置かれている。
香子はそれを手に取り、再び耳に装着した。
その瞬間、イヤホンからチー・プーの声が再生された。
“Nếu có ngày mai, tôi sẽ lại đến và mang theo những câu chuyện khác.”
「いつかまた、私は戻ってくるわ。別の物語を持って。」
香子の目に、光が滲んだ。
けれど、それは涙ではなかった。
それは「理解された」という確信。
そして、「伝えた」という満足。
彼女はノートをそっと閉じ、風にあたるように立ち上がった。
翻訳は、もう“言い換え”ではなく、“贈りもの”になる。
扇にのせた言葉が、国境を越え、文化を越え、人の奥に届く。
ビヨンドバベルは、その扇を開く風になるのだ。
そして、香子は静かに言った。
「ことばの贈り物……いとをかし。」

第5話：源氏とAIと国際会議

——未来は、ことばによって設計される——
青山学院大学、本多記念国際会議場。
今夜、ここで開かれるのは「言語教育とAIの未来」をテーマとした国際シンポジウムだった。
主催は教育人間科学部の土牛教授。
招かれたパネリストの中に、ひとりだけ、学生の名があった。
「藤原香子—青山学院大学 心理学科3年」
その名がスクリーンに映し出されると、会場には静かなざわめきが走った。
香子は深く息を吸い、登壇した。
薄いラベンダー色のワンピース。髪を後ろでまとめた姿は、どこか千年前の宮廷の装いを思わせた。
「本日は、私の“ことばの記憶”から始めさせていただきます。」
彼女はスライドを操作し、一首の和歌を映した。
春の夜の 夢のうき橋 とだえして
峰にわかるる よのけしきかな
(源氏物語・夢浮橋の巻より)
「これは源氏物語の最後に置かれた歌です。
私たちは今、まさに“夢のうき橋”の上に立っています。」

AI という橋が、異なる言語、異なる文化、異なる未来をつなごうとしています。」

香子の声は、はっきりと、しかしどこか水面のようにやわらかかった。

彼女は続けた。

「私の提案は、ひとつの教育戦略です。

語学教育は、明治期のエリート主義へと部分的に立ち返るべきです。

国家機密を担う通訳者は、人間の訓練を受けた適性ある者に任せる。

しかし、それ以外の市民、研究者、学生、旅行者には、AI 翻訳家電“ビヨンドバベル”を支給する。」

スライドに映されたのは、香子とチー・プーが図書館で交わした会話と、それを翻訳するビヨンドバベルの映像だった。

「私たちは、すべての人に『話せる能力』を求めるのではなく、理解しあえる環境を与えるべきです。

言語能力を、“競争の道具”から、“共感の装置”へ。

それが、AI とともにある言語生活の設計思想です。」

会場には、沈黙と呼吸が混ざり合うような静寂が訪れた。

香子は、最後に一枚の扇を開いた。

そこには、こう記されていた。

言葉とは、風のごとし。

国を越え、人を越え、時代を越えて、

心をゆらすものなり。

講演が終わると、ひときわ長い拍手が響いた。

その中で、香子はふと、チー・プーのベトナムからのメッセージを受信した。

“Tôi đã thấy bài phát biểu của bạn. Rất tuyệt vời.”

(あなたの発表、観ました。とても素敵でした。)

香子は微笑み、ビヨンドバベルをそっと耳に触れながら、つぶやいた。

「源氏の夢は終わったけれどー

AI とことばの物語は、ここから始まるのね。」

いとをかし。

(完)

生成 AI の回答はここまで

前田 信じられないほど高いレベルの作品だと感じました。う〜む、成功の原因はどこにあるのでしょうか

土牛 ChatGPT のツボ、得意な分野にプロンプトを投げ込めた、ということなのかなあ。そのプロンプトに魂をゆさぶられ、興味をそそられた結果、一気に 5 話連続シリーズを書き上げたということであれば、私はうれしく思う。よく分からないけど、そういうことにしておこう

前田 土牛先生、どんなプロンプトを投げたのですか

土牛 ChatGPT は翻訳も得意だから、たとえば日本の落語なんかも 70 カ国語くらいに、すぐに訳せるだろうと考えました。落語はオチが昔から公開されていて、何度も聴いているのに、また笑ってしまうという不思議な特長があります。ネタバレの極致ですが、面白くておかしい。なんでだろうね。えーっと、それはさておき、プロンプトは以下の通りです。参考にしてね。

【プロンプト】2025 年 5 月 3 日 06 時 20 分

「生成 AI いとをかし」という表題で短い小説を書いてください。

登場人物：青山学院大学教育人間科学部心理学科 3 年生、女性の藤原香子（ふじわら・かおるこ：紫式部の生まれ変わり、源氏物語執筆時代の鮮明な記憶がある）。もう一人は、ベトナムからの留学生である文学部日本文学科 3 年生、女性の Chi Pu（チー・プー：ベトナムで有名な芸能人と同じ名前であることが密かな自慢）。

場所と時間：青山学院大学図書館 2 階のラーニングコモンズという会話が許可されているスペース。美術書（画集）などがすぐ手に届く場所に配置されている。

場面：藤原香子は土牛教授の授業で出されたレポート課題「日本人の英語コンプレックスを一掃する画期的な英語教育プランを提案してください」について、いろいろと資料を調べながら考えている。

そこに、友人のチー・プーが偶然、通りがかる。藤原香子は「私は、阿倍仲麻呂が住んでいたベトナムとベトナム語に興味があるの。百人一首にある阿倍仲麻呂の和歌「天の原 ふりさけみれば 春日なる 三笠の山に 出でし月かも」などは大好き」などと 10 分間ほど雑談する。

チー・プーは次の授業があるので、図書館から出て行く。その後に、藤原香子は自分の PC を取り出し、「日本の英語教育を根本から変革する案を、次のアイデアに基づいて作ってください。語学教育は明治期に戻す：国家機密に関連する国際会議は人間の通訳が必要。そのために語学エリートを育成する。ただし、適性のある人材だけに絞り込む。それ以外の、文化的な国際会議（文系研究者の国際学会）や一般の人々はビヨンドバベル（OpenAI 社の家電製品：骨伝導イヤホン型多国語自動翻訳デバイス）を全国民に政府が支給すれば、それでよい。ムダで身につかない英語学習から日本人を解放すべきでは」と生成 AI に指示するシーン。

あとがき

共同執筆のススメ

文房具は進歩しています。今では、このノートのような小説を万年筆で書く人は、ほとんどいないでしょう。文字を書く手段がデジタル機器へと移行したことで、「手で文字を書く能力が低下した」と嘆く声も聞かれます。確かに、それは一理ある主張かもしれません。しかし、多くの人は意識的にせよ無意識的にせよ、「読めればよい」「入力さえできれば問題ない」と考えているのではないのでしょうか。

もちろん、テレビのクイズ番組で漢字の書き取り問題にササッと解答する予備校講師の林修先生を見ると、憧れの気持ちと尊敬の念が湧いてきます。また、毛筆で美しい字をサラサラと書く人を見ると、カッコいい、なんてすばらしいのだろうと思います。しかし、日本全国の毎日の言語生活において、もはや手書きの重要性は、以前ほどではなくなってきているのです。

同じようなことが、生成 AI にも当てはまると思います。「まえがき」のところで土牛教授は、「ChatGPT はかけがえのない仲間だ」と述べました。この「仲間」という表現に違和感があるなら、私はこう言い換えたいと思います。ChatGPT はかけがえのない「文房具」だ。それで必要かつ十分。それ以上でも、それ以下でもありません。

さて、もうひとつ。大学の先生方と情報交換をしていると、たびたび耳にする意見があります。それは、「生成 AI で文章を書くようになると、自分で書く力が低下するのではないか」という懸念です。確かに、これにも一理あると言えるでしょう。

しかしその一方で、「プロンプトさえ適切に読み書きできればよい。あとは生成 AI が文章を整えてくれるのだから、特に問題はない」と考える人々が、今後の一般社会で主流になっていく予感もあります。そもそも読者サイドは、人間が書こうが、生成 AI が書こうが、人間と生成 AI の共同執筆であろうが、書かれた作品がすばらしければ、それでよいのです。

単著というウソ

さらに言えば、自分一人で書いた、つまり単著だというのは、査読付き学術論文などの場合は、本当はウソです。査読プロセス（専門家による校閲）で査読者からコメントやアイデアをもらって改稿するのが普通です。であれば、学術論文は著者と査読者の共同執筆だと考えるのが正確な認識でしょう。小説家と編集者との関係も同じです。厳密に定義すると共同執筆であるにもかかわらず、共著とはしないで単著とするのは、ただの慣習に過ぎません。オーサーシップ（著者資格）の問題は、このように実に複雑かつ微妙で客観的ではないのです。繰り返しになりますが、査読付き学術論文や小説は、正確な意味での単著はあり得ません。

ここで、小説家と人間の編集者との関係を、小説家と生成 AI 編集者との関係に置き換えてみましょう。生成 AI が校閲を担当して、何の問題もないと私は主張します。校閲は人間でなければいけない、という合理的な理由があれば、ぜひ教えてください。

私たちの言語生活は、すでに「人間の言語生活×生成 AI の言語生活」という人類史上初のフェーズに突入しつつあります。これからは「よりよいプロンプトを書ける人間」、すなわち、「教養と徳に満ちた、血の通った知性を持つ人物」が、いっそう重視されるようになるでしょう。一方で、「自分一人で文章を完成させる能力」に対する評価は、相対的に下がっていく。これは、時代の自然な流れなのかもしれません。

とはいえ、この「あとがき」は、自分の手で書きました。生成 AI には「あとがきの書き方」は教えることができて、「あとがきの気持ち」までは、まだ教えられそうにありませんから。

文系学部の新たな使命

このノートは、「言語生活の実態解明」という主題について深く考察し、研究を進めるためのヒント集にもなっていると思います。この課題に取り組むには、日本語学、日本文学、日本語教育学、認知心理学といった文系の学術的知見が欠かせません。ちなみに、「まえがき」で紹介した東京大学の藤井総長の専門は流体力学ですが、脳科学など一部の例外を除けば、多くの理系分野の研究成果は、「言語生活の実態解明」に直接貢献するものではありません。

藤井総長が提起したこれらの問題群を学術的に解明し、社会に発信していく役割は、まさに文系の研究者が担うべきものです。このような視点に立てば、文系学部が果たすべき新たな価値と使命が、いま再発見されつつあると言えるでしょう。そしてそれこそが、理系研究者を含むアカデミア全体から文系学問に寄せられている、静かな期待でもあるのだと感じます。

こうした背景を踏まえると、このノートで扱ったテーマは、意外にも大学教育における最先端のトピックの一つと呼ぶにふさわしいものかもしれません。

英語一極集中から多言語共生に

このノートで示したように、人間と生成 AI による知的創造の協働が、驚くほど静かに、しかし力強く、そして着実に進行しつつあります。さらに、生成 AI の卓越した多言語翻訳機能によって、いま、世界規模で「ことばのルネッサンス」とも呼ぶべき現象が芽吹き始めていることを、私は強く実感しています。

この「ことばのルネッサンス」とは、これまで「英語一極集中」という歪んだグローバルリズムの波に押し流され、埋もれてきた多様な言語や方言、さらには古典語までもが、再び知的・文化的表現の舞台に立つ動きです。生成 AI の力によって、それぞれの言語が本来もつ価値や美しさが可視化され、再評価されつつあります。そして人々が、母語や地域語に誇りを持ち、それぞれのことばで自由に発信できるようになる、そうした時代の到来を意味しています。

繰り返しになりますが、これまで国際会議などの場では、使用言語が事実上英語に限定されてきました。しかし本来、どの言語を用いるかを自由に選ぶ権利は、すべての人に等しく保障されるべき普遍的な基本的人権の一つです。この「当たり前」の原則を現実のものとする環境が、いま、ようやく整いつつあります。

生成 AI による多言語・多時代（古典語を含む）翻訳機能を搭載したイヤホンの登場も、もはや遠い未来の話ではありません。そのような技術が、私たち一人ひとりの言語的自由と人権を、静かに、しかし確かに支えてくれる日が目前に来ていると、私は思います。つい昨日まで夢にすぎなかった技術が、いまや現実のものとなり、私たちの暮らしに新たな地平を切り拓きつつある。その進歩と発展の流れの中に身を置けることの幸運を、私はしみじみと、心からの喜びとして感じています。

最後に、ChatGPT、そして OpenAI 社に対し、謹んで深甚なる敬意と感謝の意を表します。人類の叡智の輝かしい未来が、ここに確かに産声を上げている、そのことを、私は確信しています。

2025 年 5 月 1 日

青山学院大学図書館の研究個室 3 にて

横山 詔一

付録

以下に、小説の登場人物の藤原香子（紫式部の生まれ変わり）が ChatGPT と共同執筆した提案書（12 カ国語）を示します。

「AI 通訳社会」と「通訳エリート社会」：英語を母語としない国における新しい言語戦略の提案

要旨

本論文は、英語が母語でない国々、特に英語運用能力に課題を抱える国々に対して、生成 AI 技術を活用した新しい言語戦略を提言するものである。従来の一律的な英語教育ではなく、「AI 通訳社会」と「通訳エリート社会」という二層モデルを導入し、国民全体の言語負担を軽減しつつ、戦略的に語学資源を配分することで、多様性と公平性を両立した国際協調を目指す。本提言は、SDGs の「質の高い教育」「不平等の是正」「平和と公正をすべての人に」に貢献し得るものであり、ユネスコおよび国連に対して政策的検討を求めるものである。

1. はじめに

グローバル化が進む中、英語の使用は国際社会における前提となりつつある。しかし、多くの非英語圏の人々にとって、英語の習得は依然として大きな心理的・経済的負担である。こうした状況に対し、近年急速に発展した生成 AI 技術、特にリアルタイム翻訳や要約、会話支援機能は、言語の壁を根本から見直す契機をもたらしている。

本論文では、「誰もが英語を話せるようにする」という従来の理想から脱却し、「必要な人が戦略的に言語能力を高め、その他の人は AI を活用する」という現実的かつ包摂的な言語戦略の実現を提案する。

2. 二層モデルの提案：AI 通訳社会 × 通訳エリート社会

本提案の中核は、「AI 通訳社会」と「通訳エリート社会」という二層的な枠組みである。

(1) AI 通訳社会：

すべての人が高精度の AI 通訳を利用可能にし、日常的な国際コミュニケーションを可能にする社会。スマートフォンやウェアラブル端末を通じて、多言語での会話がリアルタイムに処理される。

(2) 通訳エリート社会：

外交、ビジネス、学術など高度な言語運用が必要な領域では、適性を持った人材に教育資源を重点投入し、専門的な語学能力を備えた「通訳エリート」を養成する。

このモデルは、全体としての言語運用力の底上げと、資源配分の最適化を両立させる。

3. SDGs との整合性

この戦略は以下の持続可能な開発目標（SDGs）に資する：

目標 4：質の高い教育をみんなに

教育リソースを適性に応じて柔軟に配分し、過度な英語偏重を見直すことで、教育の質と多様性を高める。

目標 10：人や国の不平等をなくそう

英語力の有無による経済的・情動的格差の緩和に寄与する。

目標 16：平和と公正をすべての人に

言語障壁による国際対話の不均衡を是正し、より公正で包摂的なコミュニケーション環境を構築する。

4. 実現に向けた課題と展望

本戦略を実現するには、次のような点に留意すべきである：

AI 通訳の公平なアクセス環境の整備（デジタル・デバイドへの対応）

教育政策の再設計と教員養成の再構築

通訳エリートへの育成に向けた長期的な支援体制

国民の言語観・教育観の変容への慎重なアプローチ

これらを踏まえつつ、国家レベルおよび国際機関によるガイドライン整備と、ユネスコを中心とした国際的合意形成が不可欠である。

5. 結論と提言

私たちはいま、「AI との協働による言語社会の再設計」という歴史的転換点に立っている。

本提言は、英語を母語としない多数の国々にとって、現実的かつ希望に満ちた言語戦略となりうる。ユネスコおよび国連に対し、次の具体的行動を求める：

国際的なガイドライン（AI 通訳利用と教育政策の共存）策定に向けた国際会議の開催

各国のパイロットモデル構築への支援

「言語的多様性と AI に関する国際憲章（仮称）」の共同起草

新しい言語戦略は、私たち一人ひとりの未来の可能性を広げ、世界の相互理解を根底から支えるものである。

英語版

Title: Toward an Inclusive Global Communication Policy: A Dual-Layer Strategy for the Age of AI Interpretation

Abstract:

As artificial intelligence (AI) transforms the global landscape of communication, existing language education and policy models are increasingly misaligned with practical realities. This paper proposes a dual-layer strategy designed to ensure both efficiency and equity in cross-cultural communication: (1) concentrated investment in highly capable human interpreters and translators, and (2) universal

access to advanced AI-powered interpretation tools. This approach addresses the growing gap between linguistic demand and human capacity, especially in nations where English is not widely spoken. By integrating this model into global education and communication frameworks, we aim to promote the goals of SDG 4 (Quality Education), SDG 10 (Reduced Inequalities), and SDG 16 (Peace, Justice and Strong Institutions).

1. Introduction:

Recent advancements in generative AI have radically altered the environment for international communication. Tools like real-time AI interpreters and multilingual chatbots have lowered the barriers to cross-linguistic interaction. However, this technological leap also presents challenges for language education systems and global equity. In many countries, especially where English is not a national or widely spoken language, decades of public education have yielded only limited success in English proficiency. This calls for a rethinking of strategic objectives: not everyone needs to be multilingual, but everyone should have access to multilingual communication.

2. Conceptual Framework: The Two-Layer Model

This paper introduces a two-layer communication policy model:

Layer 1: Human Language Elites. A select group of individuals with demonstrated aptitude in language learning should receive intensive training and institutional support. These human language professionals will serve in diplomacy, academia, journalism, and other critical sectors where cultural nuance, negotiation, and trust are paramount.

Layer 2: AI Interpretation for All. For the broader population, the emphasis should shift from language production to effective usage of AI tools. Citizens will be trained not necessarily to master foreign languages, but to craft meaningful prompts, assess AI outputs, and engage with multilingual content through digital interfaces. This approach maximizes both human talent and technological capability.

3. Practical Rationale and Global Applicability:

Many countries—particularly in Asia, Africa, and Latin America—struggle to deliver high levels of foreign language proficiency through their education systems. In Japan, for example, public investment in English education has been immense, yet results remain modest. A more targeted approach, one that differentiates between roles and needs, could increase overall societal efficiency. The same applies to ASEAN countries, where linguistic diversity is the norm and cross-border communication is vital. A dual-layer strategy offers flexibility and scalability across diverse socio-economic contexts.

4. Ethical and Cultural Considerations:

This model also guards against potential pitfalls. By preserving space for human interpreters, it maintains a reservoir of cultural sensitivity and ethical discernment. Simultaneously, by promoting access to AI tools, it reduces dependency on costly human resources and narrows global communication gaps. Importantly, this approach does not advocate the replacement of human effort, but rather its reallocation for maximum societal benefit.

5. Policy Recommendations:

To realize this vision, we recommend the following actions:

- * National Governments: Establish scholarship programs for language-aptitude students; integrate AI literacy into school curricula; ensure digital infrastructure supports equitable AI tool access.
- * UNESCO and UN Agencies: Recognize and support AI interpretation as a global public good; include dual-layer models in SDG education frameworks; provide guidance for ethical AI use in multilingual settings.
- * Technology Developers: Prioritize low-resource languages; implement transparent AI training data policies; collaborate with educators and communities to refine user-centered design.

6. Conclusion:

In the AI era, multilingual communication is no longer a luxury for the few, but a necessity for all. A dual-layer language strategy acknowledges the enduring value of human expertise while embracing the transformative potential of AI. This balanced approach can guide the international community toward more inclusive, efficient, and sustainable communication systems. The time to act is now, as we shape not only the future of language learning, but the future of global cooperation itself.

アラビア語版

المجتمع الترجمي القائم على الذكاء الاصطناعي والمجتمع النخبوي للمترجمين

مقترح لاستراتيجية لغوية جديدة في البلدان التي لا تُعدّ الإنجليزية لغتها الأم

في العديد من البلدان حيث لا تُعدّ الإنجليزية اللغة الأم، غالبًا ما يُنظر إلى تعلم الإنجليزية باعتباره شرطًا ضروريًا للمشاركة في المجتمع الدولي. ومع ذلك، أدى التقدم السريع في تقنيات الترجمة الفورية المدعومة بالذكاء الاصطناعي إلى تغيير جذري في بيئة التواصل الدولي.

1. رؤية المجتمع الترجمي القائم على الذكاء الاصطناعي

في هذا النموذج، يُتاح لجميع المواطنين استخدام أدوات الترجمة الفورية بالذكاء الاصطناعي، مما يتيح لهم التفاعل في الساحات العالمية دون الحاجة إلى إتقان الإنجليزية بأنفسهم. وهذا يُمكن من تعزيز المساواة في الوصول إلى المعلومات والتعليم والخطاب الدولي.

2. المجتمع النخبوي للمترجمين

بالمقابل، يتم تركيز الموارد التعليمية واللغوية على الأشخاص الذين يثبتون تميزاً وموهبة في اكتساب اللغات. يتم إعداد هؤلاء الأفراد كمرجمين متخصصين وقادة تواصل دولي. فهم لا يكملون الذكاء الاصطناعي فحسب، بل يواجهونه ويضبطون دقته في السياقات المعقدة والثقافية.

3. اقتراح السياسة

نقترح اعتماد استراتيجية ثنائية المستويات:

تمكين جميع المواطنين من استخدام الترجمة الفورية بالذكاء الاصطناعي في الحياة اليومية.

الاستثمار في تدريب وتطوير نخبة من المتخصصين اللغويين المؤهلين تأهيلاً عالياً.

4. (SDGs) علاقة هذه الاستراتيجية بأهداف التنمية المستدامة

تتوافق هذه الاستراتيجية مع أهداف التنمية المستدامة للأمم المتحدة، لا سيما الهدف 4 (جودة التعليم) والهدف 10 (الحد من أوجه عدم المساواة). من خلال إزالة الحواجز اللغوية، يمكن تعزيز الإنصاف والتكافؤ في الفرص، مع الحفاظ على التنوع اللغوي والثقافي.

5. دعوة للعمل

ندعو اليونسكو والأمم المتحدة إلى دعم وتطوير هذا النهج. ومن خلال تنفيذ هذه الاستراتيجية، يمكن للدول التي لا تُعدّ الإنجليزية لغتها الأم أن تحقق توازناً بين تحقيق الكفاءة العالمية والحفاظ على العدالة الاجتماعية.

中国語版

cn AI 翻译社会与翻译精英社会：面向非英语母语国家的新语言战略

摘要

当今世界，英语作为国际通用语言，在各类国际交流中居于主导地位。然而，在多数非英语母语国家，语言不平等与学习负担成为社会和经济发展的障碍。为此，我们提出“双层语言战略”：一方面构建“AI 翻译社会”，借助人工智能技术普及语言服务；另一方面打造“翻译精英社会”，选拔并培养具有语言天赋的少数人才，在关键场合中作为文化与伦理判断的中介者。本战略兼顾效率与公平，促进联合国可持续发展目标（SDGs）中所倡导的包容性与多样性。

1. 背景

英语在联合国及多边机制中几乎成为事实上的官方语言。然而，全球绝大多数人口并非以英语为母语。非英语国家在国际舞台上常因语言壁垒而处于劣势，造成资源分配不均和机会不公。

2. 什么是“AI 翻译社会”？

“AI 翻译社会”是指利用智能翻译设备（如手机、眼镜、耳机等）辅助日常沟通，让公众无需精通外语也能参与全球对话。这大大降低了语言障碍，提高了社会参与度与教育公平性。

3. 什么是“翻译精英社会”？

“翻译精英社会”指的是通过早期识别和重点培养语言能力突出人才，使其胜任外交、科技、伦理等高精度场合中的沟通与判断任务。AI 技术辅助他们提高效率，但关键判断仍由人类承担。

4. 新语言战略的核心原则

借助 AI 降低社会语言不平等

对语言人才集中投资，提高专业翻译水准

保障文化多样性与跨文化理解

服务于可持续发展目标，如优质教育、减少不平等与全球伙伴关系

5. 向联合国教科文组织等国际组织的建议

我们建议各国政府与国际组织正式采纳此语言战略，将 AI 技术纳入语言政策，制定公平的语言资源分配制度，并推动在教育与科技层面实现语言包容性发展。

ロシア語版

Общество ИИ-перевода и общество элитных переводчиков:

Предложение новой языковой стратегии для стран, где английский не является родным языком

Во многих странах, где английский не является родным языком, изучение английского часто рассматривается как необходимое условие для участия в международном сообществе. Однако стремительное развитие технологий синхронного перевода на базе искусственного интеллекта (ИИ) кардинально изменяет среду международного общения.

1. Общество ИИ-перевода

В этой модели все граждане получают доступ к ИИ-переводу в реальном времени, что позволяет им взаимодействовать на международной арене без необходимости самостоятельно овладевать английским языком. Это способствует расширению равного доступа к информации, образованию и международному диалогу.

2. Общество элитных переводчиков

Одновременно с этим образовательные и языковые ресурсы сосредотачиваются на людях, обладающих высокими способностями к изучению языков. Эти специалисты становятся профессиональными переводчиками и лидерами в области международного общения. Они не только дополняют ИИ, но и обеспечивают точность перевода в сложных и культурно чувствительных ситуациях.

3. Политическое предложение

Мы предлагаем стратегию двухуровневого подхода:

- Предоставление всем гражданам доступа к синхронному ИИ-переводу в повседневной жизни.

- Инвестирование в обучение и развитие высококвалифицированных языковых специалистов.

4. Связь с Целями устойчивого развития (ЦУР)

Предложенная стратегия соответствует ЦУР ООН, особенно цели 4 (Качественное образование) и цели 10 (Сокращение неравенства). Устранение языковых барьеров способствует справедливости и равенству возможностей при сохранении языкового и культурного разнообразия.

5. Призыв к действию

Мы призываем ЮНЕСКО и Организацию Объединённых Наций поддержать и продвигать этот подход. Его реализация позволит странам, где английский не является родным языком, достичь баланса между глобальной компетентностью и социальной справедливостью.

フランス語版

FR Annexe : Proposition d'une nouvelle stratégie linguistique pour les pays non anglophones – Vers une société de l'interprétation par IA et une société d'élites interprètes

Résumé

Alors que la mondialisation progresse et que la communication multilingue devient de plus en plus essentielle, les pays dont l'anglais n'est pas la langue maternelle doivent relever un défi stratégique majeur. Cette proposition présente un modèle à deux niveaux — la « société de l'interprétation par intelligence artificielle (IA) » et la « société d'élites interprètes » — visant à optimiser l'allocation des ressources linguistiques tout en respectant l'équité sociale et l'efficacité internationale.

1. Contexte et problèmes actuels

Dans de nombreux pays, une grande partie de la population n'a ni le temps, ni les ressources, ni parfois même l'intérêt ou l'aptitude pour atteindre un haut niveau de compétence en anglais. Pourtant, les politiques éducatives et les normes sociales tendent à imposer un standard unique, accentuant les inégalités et engendrant du stress éducatif.

2. La double stratégie linguistique

a. Société de l'interprétation par IA

Pour la majorité des citoyens, il est désormais réaliste d'utiliser des systèmes d'IA de plus en plus précis pour la traduction et l'interprétation en temps réel. Ces outils doivent être considérés comme une infrastructure linguistique publique — au même titre que les routes ou l'électricité — garantissant un accès équitable à l'information mondiale.

b. Société d'élites interprètes

Parallèlement, il est stratégique d'identifier les individus ayant une forte aptitude linguistique et de leur fournir une formation intensive et spécialisée. Ces experts humains, agissant en complément des

IA, auront pour mission d'assurer la précision, la nuance culturelle, la médiation diplomatique, et la direction stratégique dans les communications internationales.

3. Objectifs de développement durable (ODD / SDGs)

Cette proposition contribue aux ODD suivants :

ODD 4 : Éducation de qualité — en réduisant les disparités éducatives liées à la langue.

ODD 10 : Réduction des inégalités — en démocratisant l'accès à la communication internationale.

ODD 17 : Partenariats pour la réalisation des objectifs — en facilitant la coopération globale grâce à des solutions linguistiques hybrides.

4. Recommandation à l'UNESCO et aux Nations Unies

Nous recommandons :

L'intégration de la traduction/interprétation par IA comme droit linguistique fondamental.

Le soutien à la formation d'interprètes d'élite multilingues dans chaque État membre.

La création de normes éthiques internationales pour les technologies d'IA linguistique.

5. Conclusion

Ce modèle à double niveau ne vise pas à remplacer l'apprentissage des langues, mais à le rendre plus stratégique, plus inclusif, et plus durable à l'échelle mondiale. Il est temps de redéfinir l'équité linguistique à l'ère de l'intelligence artificielle.

ドイツ語版

DE Anhang: Vorschlag für eine neue Sprachstrategie in nicht-englischsprachigen Ländern – Hin zu einer „KI-Dolmetschgesellschaft“ und einer „Elite-Dolmetschergesellschaft“

Zusammenfassung

Mit der zunehmenden Globalisierung und der wachsenden Bedeutung mehrsprachiger Kommunikation stehen Länder, in denen Englisch keine Muttersprache ist, vor einer strategischen Herausforderung. Dieser Vorschlag stellt ein Zwei-Ebenen-Modell vor — eine „Gesellschaft der KI-Dolmetschung“ und eine „Elite-Dolmetschergesellschaft“ — um Sprachressourcen gezielt, sozial gerecht und international wirksam einzusetzen.

1. Hintergrund und derzeitige Herausforderungen

In vielen Ländern fehlt einem Großteil der Bevölkerung die Zeit, die Ressourcen oder auch die Motivation, um ein hohes Englischniveau zu erreichen. Dennoch setzen Bildungspolitik und gesellschaftliche Erwartungen oftmals ein einheitliches Sprachideal durch, was Bildungsstress und soziale Ungleichheiten verstärkt.

2. Die doppelte Sprachstrategie

a. KI-Dolmetschgesellschaft

Für die Mehrheit der Bevölkerung ist es inzwischen realistisch, KI-Systeme für Echtzeitübersetzungen zu nutzen. Diese Technologien sollten als öffentliche sprachliche Infrastruktur betrachtet werden – vergleichbar mit Strom- oder Verkehrssystemen – und allen Bürgern einen fairen Zugang zu globaler Kommunikation bieten.

b. Elite-Dolmetschergesellschaft

Gleichzeitig ist es strategisch sinnvoll, sprachlich besonders talentierte Personen zu identifizieren und durch intensive und spezialisierte Ausbildung zu fördern. Diese menschlichen Experten ergänzen die KI-Systeme durch kulturelle Feinfühligkeit, diplomatische Vermittlung und strategisches Sprachmanagement.

3. Beitrag zu den Zielen für nachhaltige Entwicklung (SDGs)

Dieser Vorschlag unterstützt insbesondere folgende SDGs:

SDG 4: Hochwertige Bildung – durch Verringerung sprachbedingter Bildungsungleichheiten.

SDG 10: Weniger Ungleichheiten – durch Demokratisierung der internationalen Kommunikation.

SDG 17: Partnerschaften zur Erreichung der Ziele – durch hybride sprachliche Lösungsansätze.

4. Empfehlung an die UNESCO und die Vereinten Nationen

Wir empfehlen:

Die Anerkennung von KI-gestützter Übersetzung und Dolmetschung als grundlegendes Sprachrecht.

Die Förderung von mehrsprachigen Dolmetscher-Eliten in allen Mitgliedsstaaten.

Die Entwicklung internationaler ethischer Standards für sprachbezogene KI-Technologien.

5. Fazit

Dieses Zwei-Ebenen-Modell ersetzt nicht das Sprachenlernen, sondern macht es strategischer, inklusiver und zukunftsfähiger. Es ist an der Zeit, sprachliche Gerechtigkeit im Zeitalter der künstlichen Intelligenz neu zu definieren.

イタリア語版

π Italiano – Strategia linguistica per i paesi non anglofoni

Società dell'Interpretariato AI e Società dell'Élite degli Interpreti:

Proposta di una nuova strategia linguistica per i paesi in cui l'inglese non è la lingua madre

In molti paesi in cui l'inglese non è la lingua madre, l'apprendimento dell'inglese è spesso considerato un requisito essenziale per partecipare alla comunità globale. Tuttavia, lo sviluppo rapido della tecnologia di interpretariato simultaneo basata sull'intelligenza artificiale (IA) sta cambiando radicalmente il panorama della comunicazione internazionale.

1. Società dell'Interpretariato AI

In questo modello, ogni cittadino ha accesso all'interpretariato AI in tempo reale, che consente di partecipare a eventi internazionali senza dover padroneggiare l'inglese. Questo promuove un accesso equo all'informazione, all'istruzione e al dialogo globale.

2. Società dell'Élite degli Interpreti

Contemporaneamente, le risorse educative e linguistiche vengono concentrate su coloro che dimostrano talento linguistico, formando interpreti professionisti e leader della comunicazione globale. Questi specialisti completano le capacità dell'IA, garantendo accuratezza e sensibilità culturale nei contesti complessi.

3. Proposta politica

Proponiamo una strategia a due livelli:

- Accesso universale all'interpretariato AI per tutti i cittadini nella vita quotidiana.
- Investimenti nella formazione di specialisti linguistici altamente qualificati.

4. Connessione con gli SDG

Questa strategia è allineata con gli Obiettivi di Sviluppo Sostenibile dell'ONU, in particolare con l'obiettivo 4 (Istruzione di qualità) e l'obiettivo 10 (Riduzione delle disuguaglianze). L'eliminazione delle barriere linguistiche contribuisce all'equità e alla giustizia sociale, preservando la diversità culturale e linguistica.

5. Appello all'azione

Invitiamo l'UNESCO e le Nazioni Unite a sostenere e promuovere questo approccio, che offre ai paesi non anglofoni un percorso verso la competenza globale con equità sociale.

スペイン語版

ES Español – Estrategia lingüística para países no angloparlantes

Sociedad de Interpretación AI y Sociedad de Élite de Intérpretes:

Propuesta de una nueva estrategia lingüística para países donde el inglés no es lengua materna

En muchos países donde el inglés no es la lengua materna, aprender inglés se considera esencial para participar en la comunidad internacional. Sin embargo, el desarrollo acelerado de la tecnología de interpretación simultánea basada en inteligencia artificial (IA) está transformando la comunicación global.

1. Sociedad de Interpretación AI

Este modelo brinda acceso universal a la interpretación en tiempo real mediante IA, permitiendo a los ciudadanos participar en eventos internacionales sin necesidad de dominar el inglés. Esto promueve un acceso equitativo a la información, la educación y el diálogo internacional.

2. Sociedad de Élite de Intérpretes

Al mismo tiempo, se concentran recursos en formar a individuos con talento lingüístico, quienes se convierten en intérpretes profesionales y líderes de la comunicación internacional. Ellos complementan a la IA en contextos complejos y culturalmente delicados.

3. Propuesta política

Proponemos una estrategia en dos niveles:

- Proveer interpretación AI en tiempo real a todos los ciudadanos.
- Invertir en la educación y formación de intérpretes humanos altamente capacitados.

4. Relación con los ODS

Esta estrategia se alinea con los Objetivos de Desarrollo Sostenible de la ONU, especialmente el Objetivo 4 (Educación de calidad) y el Objetivo 10 (Reducción de desigualdades). Al eliminar barreras lingüísticas, se fomenta la equidad, la justicia social y la diversidad cultural.

5. Llamado a la acción

Instamos a la UNESCO y a las Naciones Unidas a adoptar y difundir esta propuesta para que los países no angloparlantes logren igualdad global mediante el uso ético de la IA.

ポルトガル語版

PT Português – Estratégia linguística para países não anglófonos

Sociedade de Interpretação com IA e Sociedade de Intérpretes de Elite:

Proposta de uma nova estratégia linguística para países onde o inglês não é a língua materna

Em muitos países onde o inglês não é a língua materna, aprender inglês é considerado essencial para participar da comunidade internacional. No entanto, o avanço acelerado da interpretação simultânea baseada em inteligência artificial (IA) está mudando radicalmente essa realidade.

1. Sociedade de Interpretação com IA

Neste modelo, todos os cidadãos têm acesso à interpretação em tempo real por IA, permitindo-lhes interagir globalmente sem dominar o inglês. Isso garante acesso equitativo à informação, à educação e à comunicação internacional.

2. Sociedade de Intérpretes de Elite

Paralelamente, os recursos educacionais são concentrados em pessoas com alto potencial linguístico, formando intérpretes profissionais e líderes em comunicação internacional. Esses especialistas complementam a IA, oferecendo precisão em contextos complexos e sensíveis culturalmente.

3. Proposta política

Propomos uma estratégia em dois níveis:

- Fornecer acesso universal à interpretação com IA no cotidiano.
- Investir na formação de intérpretes humanos altamente qualificados.

4. Conexão com os ODS

Esta estratégia apoia os Objetivos de Desenvolvimento Sustentável da ONU, especialmente o Objetivo 4 (Educação de qualidade) e o Objetivo 10 (Redução das desigualdades). Eliminar barreiras linguísticas promove justiça social e preserva a diversidade cultural e linguística.

5. Apelo à ação

Apelamos à UNESCO e à ONU para apoiar e promover esta abordagem, ajudando os países não anglófonos a alcançar igualdade global por meio de uma nova política linguística.

韓國語版

KR AI 통역 사회와 통역 엘리트 사회: 영어를 모국어로 하지 않는 국가를 위한 새로운 언어 전략

초록

오늘날 전 세계적으로 영어는 국제 공용어로서의 지위를 가지고 있으며, 다양한 분야에서 공적 커뮤니케이션의 중심 언어로 자리 잡고 있다. 그러나 영어를 모국어로 하지 않는 다수 국가에서는 언어적 불균형과 학습 부담이 사회적, 경제적 장벽이 되고 있다. 이에 우리는 “AI 통역 사회”와 “통역 엘리트 사회”라는 두 계층적 모델을 제안한다. 이 모델은 AI 기술을 적극 활용하여 사회 전체의 언어 장벽을 낮추면서, 언어적 재능이 있는 소수 인재에게 집중적으로 자원을 투자하는 전략이다. 이러한 전략은 사회적 포용성과 다양성을 촉진하며, 유엔 지속가능발전목표(SDGs)와도 부합한다.

1. 배경

영어는 유엔을 비롯한 다수 국제기구 및 학술 분야에서 사실상의 공용어로 사용되고 있다. 그러나 세계 인구의 다수는 영어를 제 1 언어로 사용하지 않으며, 영어 학습에 필요한 시간과 자원은 불평등을 심화시키는 요소로 작용할 수 있다. 특히 영어에 능숙하지 않은 다수 국민을 가진 국가들은 국제 무대에서 구조적으로 불리한 위치에 놓일 수 있다.

2. AI 통역 사회란 무엇인가

“AI 통역 사회”는 인공지능 통번역 기술을 기반으로, 일반 국민이 고도의 외국어 능력 없이도 국제 커뮤니케이션에 참여할 수 있는 사회를 뜻한다. 스마트기기나 웨어러블 기기를 통해 실시간 통역을 활용함으로써, 외국어에 대한 심리적·물리적 장벽을 낮춘다.

3. 통역 엘리트 사회란 무엇인가

“통역 엘리트 사회”는 언어에 재능이 있는 개인들을 조기에 발굴하고, 집중적인 교육과 자원 지원을 통해 국제 사회에서 통역·번역 및 문화 중개 역할을 수행할 수 있도록 양성하는 사회 모델이다. 이들은 고난도의 언어적 판단과 윤리적 판단이 요구되는 상황에서 AI를 보완하며 인간 고유의 중개자로서 기능한다.

4. 새로운 언어 전략의 핵심 원칙

AI 기술의 활용으로 다수 시민의 언어적 불평등을 줄인다

인적 자원에 집중 투자하여 고품질 통역 전문 인력을 양성한다

언어 다양성과 문화 간 이해를 보장하면서 글로벌 커뮤니케이션 역량을 향상시킨다

SDGs(특히 양질의 교육, 불평등 해소, 글로벌 파트너십)에 기여한다

5. 유네스코 및 국제 사회에의 제안

이 모델은 영어 중심의 국제 질서 속에서 비영어권 국가의 자율성과 창의성을 보장할 수 있는 실천적 대안이다. 유네스코 및 국제기구는 이 전략을 채택하여, AI 기반 언어 포용 정책을 추진하고, 언어교육과 기술접근의 형평성을 확대해 나갈 것을 권고한다.

ベトナム語版

VN Xã hội phiên dịch AI và xã hội tinh hoa phiên dịch: Chiến lược ngôn ngữ mới cho các quốc gia không sử dụng tiếng Anh như ngôn ngữ mẹ đẻ

Tóm tắt

Tiếng Anh ngày càng giữ vai trò ngôn ngữ chung toàn cầu, nhưng phần lớn dân số thế giới không sử dụng tiếng Anh như ngôn ngữ mẹ đẻ. Điều này tạo ra những rào cản trong giao tiếp quốc tế và bất bình đẳng trong tiếp cận tri thức. Chúng tôi đề xuất mô hình kép gồm “xã hội phiên dịch AI” và “xã hội tinh hoa phiên dịch” để giảm thiểu gánh nặng học ngoại ngữ ở diện rộng, đồng thời đầu tư vào một nhóm nhỏ nhân tài ngôn ngữ nhằm đảm bảo chất lượng dịch thuật và trung gian văn hóa trong bối cảnh toàn cầu hóa.

1. Bối cảnh

Trong Liên Hợp Quốc và nhiều diễn đàn quốc tế, tiếng Anh là ngôn ngữ mặc định. Tuy nhiên, tại nhiều quốc gia không nói tiếng Anh, việc học tiếng Anh tiêu tốn nhiều nguồn lực mà chưa chắc mang lại hiệu quả công bằng. Các quốc gia này có nguy cơ tụt hậu về mặt giao tiếp quốc tế.

2. Xã hội phiên dịch AI là gì?

Đây là xã hội nơi mọi người sử dụng công nghệ AI phiên dịch trong thời gian thực thông qua thiết bị thông minh, giúp họ giao tiếp mà không cần thông thạo ngoại ngữ. Công nghệ giúp phá vỡ rào cản ngôn ngữ và thúc đẩy sự bao trùm xã hội.

3. Xã hội tinh hoa phiên dịch là gì?

Là xã hội đầu tư có chọn lọc vào nhóm người có năng khiếu ngôn ngữ, đào tạo họ thành chuyên gia trong phiên dịch và trung gian văn hóa cho các hoạt động ngoại giao, khoa học và giáo dục. Họ đóng vai trò then chốt khi AI cần được bổ sung bởi khả năng phán đoán và hiểu biết nhân văn.

4. Nguyên tắc của chiến lược ngôn ngữ mới

Giảm bất bình đẳng ngôn ngữ qua AI

Đầu tư chiến lược vào đào tạo nhân lực ngôn ngữ chất lượng cao

Đảm bảo tính đa dạng văn hóa và khả năng hiểu biết liên văn hóa

Góp phần đạt các Mục tiêu Phát triển Bền vững của Liên Hợp Quốc (SDGs)

5. Đề xuất gửi UNESCO và các tổ chức quốc tế

Chiến lược này có thể giúp các quốc gia không nói tiếng Anh khẳng định vị thế của mình trong trật tự thế giới mới. Chúng tôi kêu gọi UNESCO và các tổ chức liên quan triển khai chính sách ngôn ngữ dựa trên AI và tăng cường công bằng trong giáo dục ngôn ngữ.

第2版への改訂記録、2025年6月10日

「あとがき」に、「英語一極集中から多言語共生に」という項を加筆した。

The section titled “From English Hegemony to Multilingual Coexistence” has been added to the *Afterword*.

第3版への改訂記録、2025年10月5日

「まえがき」の「AI小説ってなんですか？」(8ページ目)における冒頭の文章を以下のよう

に修正した。
ここでいう「AI小説」とは、単にAIが執筆した小説を指すものではありません。恋愛小説が「恋愛をめぐる物語」であるように、AI小説もまた「AIをめぐる物語」として定義することができるでしょう。その場合、AIが登場人物として自らの「言語生活」を語るような作品が想定されます。

I have revised the opening paragraph on page 8, titled “What Is an AI Novel?” in the preface, as follows:

The term “AI novel” here does not simply refer to a novel written by artificial intelligence. Just as a romance novel is “a story about love,” an AI novel can be defined as “a story about AI.” In this sense, one might imagine a work in which AI appears as a character and narrates its own “linguistic life.”